

14.6二-338



1200600228791

14.6二

338

中央氣象臺彙報

第三冊 (災異誌)

同台編



始



146-

338

中央氣象臺彙報

第二十冊(災異誌)

中央氣象臺

發行所寄贈本

自序

この寫本は(一)宮城縣宮城郡松島村の眞野七五郎が、杉板に記し子孫の箴として遺言せし、天保四年饑饉記事。(二)宮城縣遠田郡南郷村附近に住せる荒氏の、寛政十二年以降明治十八年に至る八十六年間。(三)同村附近に住せる高橋氏の、文化五年以降明治四年に至る六十四年間の古曆に曆面の餘白又は表裏に、尙ほ足らざる年には更に紙を裁綴などして、巨細に記載しある氣候其他に關する記事を全部、編者が大正六年より昭和九年に互り餘暇を利用して寫したものである。本稿中屢々用ひた□「」等は、□は虫喰ひ、又は汚損等の爲めに不明。「」は脱字と思はれ私の推察記入せる箇所印である。

尙ほ成るべく原文の儘謄寫したが、(イ)地方語にて一般には難解と思はれる言葉は現代語に、(ロ)一般に知られぬ様な大字、小字、町、沼等は所在郡市町村名を(一)を附して記し、(ハ)年月日は(一)を附して新曆を對照附記した。

終りにこの寫本は二冊を作り、一冊は往年岡田先生に祝意を表して呈したのであるが、今回畏友山田琢雄氏の切なる御勧めにより、藤原臺長閣下の御許を得て本誌の餘白に連載し、各位の座右に呈することとし、岡田閣下の御許を得た。茲にこの稿の由來を冒頭に記して兩先生及畏友に深謝の意を表す。



146= 338

目次

天保四年饑饉記事	一
寛政十二年、十三年	六
享和二年	六
同三年、四年	八
文化二年	九
同三年	一〇
同四年、五年	一一
同六年	一二
同七年	一三
同八年	一四
同九年	一五
同十年	一六
同十一年、十二年	一七
同十三年	一八
同十四年、十五年	一九
文政二年	二〇
同三年	二一
同四年、五年	二二

同	六年	二二
同	七年	二四
同	八年	二六
同	九年	二七
同	十年、十一年	二八
同	十二年	二九
同	十三年	三〇
天保	二年	三一
同	三年	三二
同	四年	三三
同	五年	三八
同	六年	四〇
同	七年	四五
同	八年	五三
同	九年	五五
同	十年	五八
同	十一年	六〇
同	十二年、十三年	六一
同	十四年	六三
同	十五年	六四
弘化	二年	六四

同	三年、四年	六五
同	五年	六六
嘉永	二年	六六
同	三年、四年、五年	六七
同	六年	六八
同	七年	六九
安政	三年、四年	七〇
同	五年	七一
同	六年、七年	七二
萬延	二年	七三
文久	二年、三年	七四
同	四年	七五
元治	二年	七五
慶應	二年	七七
同	三年	八一
同	四年	八四
明治	二年、三年、四年	八五
同	五年、六年、七年、八年、九年、十年、十一年	八六
同	十四年、十七年、十八年	八七

宮城縣 附近 災 異 誌

高 木 健 菟 錄

天保四年饑饉記事

天保四癸巳年六月二十五甲子日(八月十日)に當り雨降(り)夫より降り續きに相成り不熟不作に相成り當御國許は勿論近國共に諸人凍餒に及候に付右年中の氣候并作物熟候を覺控留(む)。天保七年大凶歲にて過半飢渴に及(ぶ)同八年七月迄、御國許は大に流民相出(で)饑死仕候者并直段相場書留置候事

天 保 四 年

正月より年々の氣候と同じ、同月か二月上旬かと覺(ゆ)雷有(り)右に付き諸人當年は日照(り)かと悦(ぶ)是も近年雨年にて窪地通り(低き土地のこと)は大に水損(水害)致し日照(り)を悦(ぶ)は勿論(なり)五月上旬迄御日和能(く)少(し)づつ雨有(り)田植も首尾克(く)植仕舞(ひ)田の草も二番草迄は都合宜敷六月二十四日(八月九日)迄御天氣、節に隨ひ氣候に應じ麥は上作に候得ば諸人悦をなす。六月二十五日より雨降(り)九月上旬まで降續(く)其間は御天氣宜敷日和も有之候得共降續(き)の雨故地方(地面)かはく間も無之候。去年辰の冬日照(り)(早)寒氣甚敷(く)近年に覺無之候右に付竹并(に)桃椿などの木、所(に)より枯る。去々(年)卯の年中奥通り(山間の地?)は(は)勿論大谷郡(?)より少々竹は枯る其節寒(さ)は餘科(程)に候得共雪は少(し)降る。巳ノ年十二月二十日(五年二月二十九日)



紀元二千四百九十三年

麥上作

竹、桃等に寒枯の箇所生ず

大洪水

前年諸穀不作

草木發芽遅

冷害

前年出羽凶作

より大雪降る三尺余近年の洪水にて所々大に損す去辰年は四分通りの作、卯年は七分通作刈田郡名取郡(宮城縣)大洪水にて田畑井人家に壓(押)寄せて押流さるる角田町(伊具郡)は大々痛みに相聞へ田畑岡に寄ると聞へ、右洪水にて一統米高値す。大豆も不熟米金一切(一切は四斗十三文即ち一分銀を稱す?)に付き三斗五升也卯年の事なり。巳ノ年野山草木曆よりは十五日も晚し田植は初田植又は中をかけて植(え)候者稻少(しく)吉(良)節(折)を相待(ち)後に植(え)候者とこやし(肥料)を多く入(れ)候者は作悪し。六月二十五日(八月十日)より雨降續き七月に相成候て諸人大に歎く。高城町(宮城郡高城村)米問屋にて拂(へ)穀一圓(一向)無之、在郷より出穀なく當村より毎日買入出(で)候得共初二斗づつ問屋にて賣られ八月十日(九月二十三日)より松島へは賣可申様無之候。高城御役所より當肝煎(入)衆も申傳(ふ)村中大に困る右に付御地頭様へ願申上候處一人に付二升づつ二度御拂出る一升代五十三文に御恵み被下候事同月初備藏親願の上拜借五十三俵也。此節私共借不申候又同月二十三日(十月六日)七十俵拜借此節村中不殘當家扱五斗四升なり。此節は御方丈様并諸寺院様に米無之候勿論近國南部秋田伊達相馬最上米澤當御國にては米高値去辰ノ年出羽國ハ大不作にて金一切に付一斗二升の相場と聞(く)。此御流民當國に來る。勿論御城下在々共に騒動す。米賣買なし八月中も雨度々降る當御村御物成内田地見八月十五日(九月二十八日)村役付出る不熟不作故御田代七百文斗(り)御年具(貢)に見奉(る)。右に付御役僧方御聞濟なく同月末田地見可入候様被仰候九月初に御田地見に相成及川玄庭老御出(で)村役付不殘御田地見直りにて御年具十三俵斗り上る。御百姓一統迷惑す當不熟不作に付、御屋形様江戸表御いとま御免にて十一月二十三日(一月二日)御城下御着夫より段々御法嚴敷御城下は勿論在々共に大に悦深(ぶ)併米持の百姓は不悅春中人に寄りての義には候へ共當御郡(宮城郡?)味明村(?)百姓太左衛門は別して仁心深く米拂等にも少々下直に拂申候。十月十二日(十一月二十三日)高城町問屋に穀無之候。在郷に行きあいたへ(相対)に賣買金一切に付米一斗七升より。十二日に古米に候へば一斗二升迄搗米八升五合迄十一月二十七日(一月六日)御法事あり、其御御宿に付御郡より被相迫候節米一升百六十五文拂御法事過肝變善左衛門衆自分を以て一升百六十文拂大屋形様より御郡奉行様へ御直々萬民相助候様被仰渡候段已十二月右に付所々に御越年御徒目(目付?)様御同斷右に付午正月(天保五年)初より玄米一斗五升に成る搗米は一升代百十九文格別人心も長閑に相成當御郡は不

救済事業

申及世上何となく宜敷罷成候事當村困入候儀は御代官村より巳十月中穀物拂村留にて他村拂不相成譯にて當村は小高村(貧村)百姓故一統買喰三分ノ二(全村の?)大難儀に相成申候十二月十八日(天保五年一月二十七日)御地頭村より御救米一人に付二升づつ當家は一斗頂戴す備親拜借此節當家四斗九升拜借仕十二月二十五日(五年二月三日)御村中へ餅玄米一石并錢五貫匁被下置候御方有之候門一軒に付二升(に)百文但村中八軒助情不請午正月二十六日(五年三月六日)より御仁の御思召を以て海道(街道?)御普請御救助を以て御取立被成下一人分働に米九合を以て高城院より赤沼渡迄(何れも松島附近の地名)人足二千三百人には御制道(御政道)被下置候誠にも我も難有奉存候

高値に相成候分

一、米 十月より二斗右相場にて一圓無之に付在郷にて直賣一斗、大豆 三斗七升、小豆 一升八十文より七升也十二月に一斗二升依仕一兩三朱より五切まで
一、そば 七十五文、味噌 百二十文、醤油 百三十四文、酢 八十文、油 四十八文、清酒 一升百三十三文、酒 一、濁酒 おかゆと名付くもろ、一、大根 五十文、一、鹽 はく(を?)、一、草鞋 三十文、一、綿 一切に六十、一、煙草 一本四十目物四十八文已年七月まで、一、山のところ 一、目目に付六十五文より二十文まで候然(併?)大根かての割合にては一、目目四十五文位にて可然但し喰様格に有之候

草木實入(結實)熟候物

一、梅 大に生る前年一升四十五文位當年は一升三十三文高直にて後に八十文位に相成申候、一、大麥 大よし熟春三月頃迄は少し悪(しく)相見(へ)候(共)實入(と)相成候ては近年に覺無之候能熟り小麦同斷、一、竹の子 大に生る不氣候故しひな(出来損い)同、一、栗 大に生る然(併?)不氣候故しひな有、一、栗 大に生る然(併?)不氣候故しひな有、一、栗 大に生る然(併?)不氣候故しひな有、一、栗 大に生る然(併?)不氣候故しひな有

秋田領飢饉状況
畜類を食す

右不熟不作にて諸人大に歎き羽州秋田最上南部米澤伊達相馬當 御國元よりは別して飢渴に相及候事に聞え候猫犬牛馬喰候事風聞に有之其節鹽釜越後屋に手間取(傭人)に居候者秋田出生の由段々秋田杯の餓死に相成由を聞(き)兩親兄弟行衛如何成る事哉(と)主人に暇を相願(ふ)主人も親切なる者と心得白米五升を其本人に與(へ)右の者を秋田へ遣はし生れ里へ参り村内を見候に十軒に一軒位人も居(り)段々親家へ参りて見候へば門戸を明けて一人も見(へ)ず隣家へ参りて相尋ね候處其あると教へて曰裏座敷に臥し居候やと答(ふ)教の如く裏屋に行て見れば兄一人足をまといて臥し居り兩親妻子何處へ至る尋ね候處兄答(て)曰く不孝なる哉悲い哉皆餓死せり夫れを親兄弟のわかちなく皆今日の食になせり。貴殿も長居しては生残る我々に永い内には切(き)被喰候事と相知れ不申候間早速仙臺(へ)戻り命斗りは助

人肉を食す

宮城縣飢饉狀況
馬を食す
人肉を食す

救済事業

(かり)吳(れ)先祖の名跡をも引□□□□無據早速鹽釜へ相戻り始終の□□□□聞傳へ候得共左迄畜類亦是人間達
□□□□と相成間敷存じ居候處□□□□□□□□實に遠くは知り不申候へ共牡鹿郡石巻在郷は馬を喰候義駢と承候
可恐事□□□此邊高城本町の者十三歳の子供(の)「う」でを煮て喰候義承り候誠は町中村はづれには流民衆横たはり
終には犬からず被喰(くわれ)「う」でや足をくわへて歩行いたし可恐事と迄至り勿論天保七年の作物にては五升
一步四升五合一切にて高値のわけにも有之間敷稻一束に付米一盃(二合五勺)位二盃取は上作に相見へ候山根(山麓
—當地方にては丘陵の斜面を指す)□□は川岸通は一粒も不實(不稔)候右に付古(備米)取持者は在郷にても町方
にても餘り難義不仕候買食の衆は凌ぎ兼候。猶氣候まけと申して何によらず喰度氣に許り相成候此義は貴賤上下皆同
じ事に候此内大食者は腹ふくれ顔やせ手足は勿論骨と皮ばかりに相成餓死まけの者は目ぼうたぶ(頬)すぼまり段々
には耳も不聞目も見へず舌うごかず總身に冷え返り夏の暑にも手足を働す事しび附なく相成事に見へ申候右故萬事の
持も不相成段々には心にて心を痛めて富家を恨み盗人の心相出で恥しき申義相見へ不申候たとへ有徳の者も少は曲氣
に見へ迷惑の衆は盜などの心持の者は餓死を凌ぐ様相見へ申候此惡事必ず〳〵慎むべき事なり誠に若女の月やくも相
止まり候に承る。尤も氣候まけの衆は總身に垢つき洗ひ共及ばす右のわけ合は皆人の知る處には候へ共定めて追々は
忘れべく候間たとへ世間で忘候共當家にては時々此書付を家内中へ見せ聞かせ外へも折入候(入懇)衆へは相讀(ま
せ)可仕此御村は脇(傍)村と違へ小高にて無高百性多にて米高直に相成候へば何時にても職人は細工無之商人は賣
買無之候間おのづから錢取なく候へば米穀買(ふ)見語(見込)相知れ不申候間無行衛又死つづれ等に相成候間人の爲
我ために候間穀物を專一に相備申可候たとへ高直段と米相成候共金銀には惚れ申間敷候
一御屋形様思召を以て御助粥被下置御小屋を掛被下西の年(天保八年)秋迄一人に付米一合積を以て御救助被下置誠
に何萬人と申敷知れ不申候 御仁情父母より重き御恵にて人も我も助り其御救助と申は申ノ十二月末より西の八月迄
には一人に付金に積りて九切五分位に相見へ候。五人の家内にては十一兩程にも相成右米麥豆味噌
一步に付
一、米 四升五合 一、大麥 同斷 一、小豆 一升三百三十文 一、大豆 七升 一、濁酒 一升 一、清酒 一升六百文但
右餅の爲に高値

り 一、元秣 一斗 九十文 一、せうふり 一升二百 一、鹽 不足 一升百六 一、鐵 不足高値にな
五十文 十文位までなる

天保十年冬より

總じて食物(は)勿論衣類諸道具段々高値一日に手間代三百文程食物の外天保十年より高値に相成、凶歲中金錢一統不
通用故皆迷惑、衣類諸道具誠に下直商買の義宜敷者濁酒屋元秣屋地金買者 御上様にへつるふ者高利付の金貸者其外
盗心の者

備荒箴

右之通相違無之候間第一に家内睦ましく働(き)怠たらず米穀備置(き)一家一類(は)勿論隣家に迷惑の衆有之候はば助
情相加吳候様頼申候、尙御村方御救助の米穀九ヶ月間拾五石程にて間に合候間此米凶歲無之譯にも知れ不申候間親百
石相渡爲備候間末々共に至(る)迄駢(と)相守吳若(し)天明四年天保七年杯の凶歲に相成候節は其年の十一月迄には 御
上様より御尋ねも有之べく候間其節は御地頭様へ窺(伺)上御指圖の上自在可仕百石の内二十石親類縁者へ助情三十
石御村方に迄是は御郡方并御寺様より被仰付次第可仕候跡五十石家内相續見語相立餘分を以て近所組合の衆へ何分粗
食仕大根ところかてを相加へ子孫相續(し)末永(く)相守吳候様頼入候粗食仕候は宜敷取草不知海草何に不寄不知物は
喰(ふ)べからず必(ず)喰物は氣を付(る)様可申候、慎(し)み第一(に)御座候命は人も我も私の身に無之先祖より相傳の
義にて若(し)背く者へは 天道を可恐慎(し)むべき筋を教らるべく候事
我死去明日にも知れ不申候間教置候通かたく相守可申若不守に於ては精進と名を付魚肉を去り僧を請じ讀經供養候
共恭無之候

天保十一年五月二日□□□

右は巾九寸(曲尺)長サ五尺九寸二分の杉板表裏に細字を以て記しあり。近代土藏の棟間に狭みありたるもの
由にて予が石巻測候所在職中大正六年八月筆者の末裔にて同町門脇に住せし通稱松島事眞野榮八郎氏持參し貸く
れたるを轉寫せしなり。尙ほ板を容れし紙袋に左の如く記載しありたり。

(表) 宮城郡松島村 眞野七五郎書備置

(裏)

保存人 眞野榮八郎

寛政十二庚申年 (紀元二千四百六十年) (荒氏)

九月二十日 (十一月五日) 初霜。同月二十九日大霜。小堀に氷張る。
九月二十八日 (十一月十三日) 少しばかり雪降る。
二月より十月まで大洪水なし。

寛政十三年 (紀元二千四百六十一年)
享和元年 (紀元二千四百六十二年)

□□六月?大水山崩れ人馬死す事多し北上川二十日より□夜□人馬共に殊の外流る□月二十日雨不降。
二百十日極上天氣西風少々吹く同晩七ツ時より少々雨降る翌朝は晴る上天氣也。
八月八日 (九月十五日) もづ高ね (高音) 出す。
二百二十日 (は) 五日 (八月) (九月十二日) なり上天氣同晩四ツ過より雨降り出す六日不晴雨なり六日晝七ツ半まで降る無風なり。

初霜・初雪・暴風

百舌啼く

洪水

三月改元

初霜・初水

初雪

十月人 (八月) (十一月十三日) 霜十一日雨降る十三日 (十一月十八日) 初雪大風。
十一月十九日 (十二月二十三日) 晩大雨。
冬至入日 (舊十一月十七日) 名緒沼 (宮城縣遠田郡) に投網 (す)、上天氣 冬至より寒 (一月五日) まで雪一向に不降
□□十一日 (一月十四日) 十二月十五日三寸程も降り候事。
寒入三日目 (一月七日) 大雨也其後一向雪降らず、正月五日 (二月七日) 迄引續き雪不降。

享和二年 (紀元二千四百六十二年)

十二月より正月十九日 (二月二十一日) まで雪一向不降二十日五寸二十七日 (三月一日) 大雪八寸程

暴風雨
洪水

結霜

暴風雨初鮪

地震

洪水

甘露

落雷

大洪水、死者生ず

初霜

初雪

暖冬

三月四日 (四月六日) 下郡 (遠田郡下郡沼) 鮪不多。十四日出來川 (小生田町より南郷村を経て) 鮪少なし。十三日 (四月十五日) 大雨大水南川。二十一日 (四月二十三日) 雨降り二十二日大風西風二十六日曉八ツより雨降る。西川九合水。下埠七合。南川七合。□□土手押切 (欠壤) □切る二郷筒山 (南郷村字二郷の用水堤防の意?) 切。十九日 (四月二十一日) 霜降る。

四月四日 (五月五日) 初鮪出る。風大時化 (御國) 一體にて。
五月朔 (五月三十一日) 中地震朝五ツ半時。二十三日 (六月二十二日) 暮時より雨降り二十四日明時に至る。二十七日夜曉八ツ時押切る。

六月三日 (七月二日) 晩かん露降る。みよがの葉 (殊の外) 落る。六日南川へ鱒取人夫出る。十二日大雷大手御門土手大杉へ落る。晝八ツより大雨七ツに晴る。二十五日より雨降二十九日 (七月二十八日) より大雨關根村土手八十間程切、北浦 (村) (小牛田驛前) 筒 (堤) 切る。

七月朔日 (七月二十九日) (馬場) 不殘 (田畑) の水押揚る。二郷村一ヶ所押切。松山分二ヶ所、七日 (八月四日) に御 (領) 地共に一體引拂 (洪水治まる意?)。北上川洪水、鹿又 (桃生郡) 土手押切都合五ヶ所、居水 (内水?) 流るる所赤生津 (登米郡豊里村) 死人五十人程あり。

二十三日 (八月二十日) より残暑、土用中同断の暑き年なり。
八月六日 (九月二日) 晩曉七ツより南風吹荒る。十三日もず鳴く。
九月二十六日 (十月二十二日) 初霜。

十月二十日 (十一月二十二日) 初雪降る。二十六日大雪四寸程。
十二月十三日 (享和三年一月六日) 寒入より雪一向不降二十九日まで。二十七日晩少々雨降り。二十八日四ツ晴。
二十九日 (一月二十二日) 上天氣南風吹き洗物等は堀にて水用 (ふ) 夏川同然。二十八日晩二十九日晩大モヤ甚 (だ) 暖氣。

享和三癸年 (紀元二千四百六十三年)

暴風
大雪

閏一月三日(一月二十五日)大雪六寸積る。十日極大風朝五ツ時より。十一日晚より翌日まで大雪。十四日晝大雪。十六日西風。

四月十三日桃開花
初鮪

二月六日(三月二十八日)より七日まで大雨。八日大風。九日晚雨。二十二日(四月十三日)桃花開く。

初鮪

三月十日(五月一日)初鮪。

稲にじぶ及蟲付く

四月三日(五月二十三日)大風。
五月朔日(六月十九日)雨降る。十四日雨降。二十六日大雨降。二十九日初胡瓜切。

洪水

六月朔日(七月十九日)わせ大豆用る。(上旬末頃?)。稻(へ)葉しぶ出で一體其上虫甚だつく。
七月二十日上天氣。

大霜

八月十五日(九月三十日)朝より大雨、晝七ツ時より北風大風。十六日八ツ時白ヶ筒押切幅二十間余切、前川七合以上出水。二十六日(十月十一日)大霜。

三月改元

十一月六日(十二月十九日)大雪。

享和四年 文化元年 (紀元二千四百六十四年)

(以上荒氏記録)

櫻花盛り
苗代に氷張る

二月三日(三月十四日)大雪。六日より七日まで大雪。十日甚だ暖氣。二十五日(四月五日)大風。二十七日大風。

暴風

三月十三日穀雨(四月二十二日)仙臺の櫻花盛りなり。二十日(四月二十九日)朝苗代に氷張り候事。種蒔き盛。

洪水

四月二十三日(六月一日)西風大風雨少々降る。

大地震、續震あり

五月十日(六月十七日)大川メ切。十一日晝九ツ時より雨降る十二日晴。十五日晚九ツ時より大雨翌十六日(六月二十三日)メ切破る。
六月四日(七月十日)晚四ツ時大地震引續き十五度ゆる。五日六日引き續きゆる。十二日晚より大雨朝晴。二十七

大雷雨・落雷
仙臺二ノ丸雷火にて焼失す
地震

日(十七日の誤りか)曉七ツ半時地震、同日晝八ツ中地震ゆる。同日晝九ツより雨降る。二十日(七月二十六日)晝九ツ時□大雷□□□□□□□□□□六ヶ所。二十日より引き續き日々の雷二十四日仙臺御城雷火にて御二ノ丸焼失。二十四日晝八ツ時より暮時迄燒炎。二十七日(八月二日)晝八ツ時地震二十九日朝七ツ時地震三度ゆる。

南の暴風

七月十五日(八月二十日)晝九ツ時より雨降同晚□時晴る。十六日より折々雨辰已風日々吹き續き二十日まで風の模様。二十六日(八月三十一日)南風明より吹き出し翌二十七日朝五ツ時やむ。雨一向不降に大風なり。二十八日二十日無風少々雨降る。仙臺二ノ丸雷火焼失。(重記?)八月八日二百二十日上天氣。彼岸中上天氣一向雨不降。二十

七日(九月三十日)晝八ツ時より雨降り晦日(十月三日)晝晴る。晦日朝四ツ時大風。
九月朔日快晴。
十二月十四日(一月十四日)晩暮より大雨十五日迄。

文化二年 (紀元二千四百六十五年)

一月元日(一月三十日)上天氣、三日曉八ツ時より雨降り四日、五日晴る。二十六日雪降り二十八日(二月二十七日)大雪。

櫻吹く

三月二十三日穀雨(四月二十二日)に仙臺釋迦堂の櫻吹く。二十六日盛り。

五月十六日(六月十三日)(芒種舊十日)大川メ切。同晚雨少々降。十八日晝九ツ時より雨降る。二十二日より二十四日まで雨降る。

七月十八日(八月十二日)晝七ツ時より雨降り十九日晴。二十日晝少々降り。二十三日雨降り。二十七日晝□時より雨降り二十八日朝五ツ時まで降り。

八月十日(九月二日)朝少々雨降り五ツ時より上天氣。十三日晚四ツ時より雨十四日まで降る。
閏八月四日(九月二十六日)より雨降り七日迄。十一日より十三日まで雨降り。十五日晚より雨降り。

西の暴風
苗代結氷

十月一日(十一月二十一日)大風西風。二日朝大霜苗代へ氷張り。

西の暴風
梅開花

十一月二日(十二月二十二日)雪降り。二十五日晚雨降り。二十六日西風大風。
十二月二十日(二月八日)盛寶寺々内梅開く(立春舊十八日)。二十九日晚七ツ時半より雨降り同晩雪。

文化三 寅年 (紀元二千四百六十六年)

暴風雪

一月元日(二月十八日)雪降り。七日より二十日まで一向雪(も)雨(も)降らず。二十四日雨降る。晦日より二月一日まで。
二月朔日(三月二十日)大雪。六日大雪^{江戸}。九日雪降り。十日大風。十八日雪降り大風。二十六日より二十八日まで雨降り。
三月四日(四月二十二日)朝より雨降り五日朝まで。
四月一日(五月十八日)極大西風。三日同断。五日六日雨降り。十三日雨降り。二十七日二十八日(?)雨降り。三十日(?)雨降り(?)。

洪水

五月一日(六月十七日)洪水、南小牛田ニケ所土手押切。白ケ筒、彌平用水筒朝日押切、木間塚押切。十三日大雨。

真鶴渡来

二十三日胡瓜切方始る。五月二十三日(七月九日)真鶴ニツ百々谷地に来る。同二十日鶴八ツ程通り候由。六月六日(七月二十一日)朝より七日九ツ時まで大雨。十五日(七月三十日)早稻出る。二十日大雨。

早稻出穂?

七月十六日(八月二十九日)晩大雨。二十日大南風。十一日晝より雨降る。

南の暴風

八月朔日(九月十二日)大雨二日晴。三日晝より雨降る。七日晚より蚊帳不用朝夕涼しく。八日晚より雨降り。

蚊帳を去る

九月七日(十月十八日)晝七ツ時半より夜四ツ時まで大雷。十三日(十月二十四日)大霜。

大霜

十月八日(十一月十七日)初雪降る。

初雪

十一月五日(十二月十四日)雪降る。十二日雪降る。

大雪

十二月十五日(一月二十三日)大雪。

文化四 卯年 (紀元二千四百六十七年)

大雷

一月元日(二月六日)上天気。三日大風大雪。五日雨降り。十九日(二月二十五日)暮時大雷同晩雪降る。

春寒

二月二日(三月十日)大風。三日雪降り。四日より七日まで寒中の如く堀へ氷張る。晦日(四月七日)より氷張る。

結氷

二月日々大風。

連日強風

三月 二月より三月七日(四月十四日)まで雨一向不降。八日大雨。二十五日雨降り二十六日大風。

長雨

四月 日々大風(十五日の上欄に記入あり)。

大水

五月二日(六月七日)晩大雨。二十一日(六月二十六日)より六月三日(七月八日)まで雨降り。

大暴風

六月五日雨、六日雨。七日晚より八日迄雨、九日大雨。十二日より十八日迄雨、十八日八ツ時晴。十八日(七月二十三日)晩より大雨、同晩雷、十九日雨降り、同晩大水、二十日晴、二十一日不天気晝より雨降り二十三日天気快晴。

暴風雨

七月五日(八月八日)雨降り、六日晚より大雨、七日同断、八日晴。十四日晝七ツ時より大雨同晩四ツ時晴。

彗星

八月一日(九月二日)晩雨風。二日風雨なし。六日晚大風雨降る。七日風。十五日(九月十六日)晩頃より西の方へ彗星出る。

大暴風

九月十六日(十月十七日)晝七ツ時より雨降り、翌十七日無類の大風、同晩四ツ時少々風ぎ所々大破ありし。

十月十二日(十一月十一日)大風大雨。

十一月四日(十二月二日)大雨。二十四日より大雪二十六日晴る。

十二月二十八日(一月二十五日)晩大雨。

文化五 辰年 (紀元二千四百六十八年)

一月元日(一月二十八日)上天気。

六月七日(六月三十日)初胡瓜切り。十五日雨。十八日雨。二十四日雨。二十九日大雨。

大霜
初雪

九月八日(十月六日)大霜。十八日晝七ツ時より雨降同晩大風。
十月三日(十月三十日)朝五ツ時半時より雨降同晩大風大雨。二十七日(十一月二十三日)晩初雪。
十一月十七日(十二月十三日)晩雪降三寸程。雨十二月まで一向不降。
十二月五日(十二月三十日)より雪一向不降。
(以上荒氏記録)

文化八年 未辛年 (紀元二千四百七十一年)

乏雨
酷寒
二百十日
初霜
彗星

一月 七年十一月十八日より正月八日(二月一日)まで雪一向不降九日晚七ツ時少し降る二寸程、十日一寸程降る。
十二月十三日より正月九日まで草履道(道路乾燥し草履にて歩)元日上天氣同日草履にて年始。十日より甚だ寒さ。二
十日(二月十三日)大□寒難凌程の寒也。十七日(晩)大雪七寸程降、十八日朝五ツ時晴る。二十八日晚八ツ時より大
雪、同晝(朝)五ツ時より大雨二十九日晚より大風。
二月朔日(二月二十三日)晩大風、二日晚雪降大風、三日晩大風晝同斷西風。十三日(三月七日)近(頃無)雪日々雪
降大風寒中の如く。十四日晚八ツ時より暖氣同上天氣。十八、十九日(日)雨降、二十日西風大風。(二十)二日夜四ツ時
より(雨)。十三日夜□時晴。二十五日晚雨降。(閏二月あり)
三月朔日(四月二十三日)初霜六本に付三駄。
四月二十五日(六月十五日)上天氣。
七月十六日(二百十日)(九月三日)霜降る上天氣□風。
八月朔日(九月十八日)晩より西北の方へ彗星暮時より出る。
九月二日(十月十八日)初霜(?)
十月十七日(十二月二日)大雪。
十二月朔日(一月十四日)上天氣。六日雨降。二十八日雨降。二十七日晩より雨降。二十八日晝晴る。
(荒氏記録)

大雪

文化九年 申壬年 (紀元二千四百七十二年)

大雨
大雨
大洪水
初雪

一月元日(二月十三日)上天氣。十三日晚四ツ時より大雪。十四日終日降り近年無覺大雪三尺の上(餘)降。
二月朔日(三月十四日)雨降。
五月七日(六月十六日)大雨。
六月七日(七月十六日)大雨。
七月六日(八月十三日)晩雨降。七日降。八日晝八ツ時より雨降同晩大雨南川土手押切。大柳、練牛の間四十間程九
日八ツ時切。十四日晝より雨降、十六日大雨、十七日晚南(郷口)小寺治助前土手押切十五間程。練牛押切同日又以切
る。北上川大水にて名儲沼へ水入る。大洪水二十日迄引續雨降る。
十月十三日(十一月十七日)初雪。晦日(十二月四日)大雪。
(大洪水記事) 此年夏大日でり村々雨乞七月に至り雨降同月九日夜仙府大橋川大洪水。一、淀角小路御木場一字流。二、下淀
家数七八軒流。一、川内御小人町家根の上まで水相増十人許死亡。一、中ノ瀬家数五六軒流。一、大工橋落る。一、中ノ町御小
人五六軒流兩人死。一、御花壇二字流。一、三十三間堂流。一、大橋大損。一、御評定橋落。向御靈屋下東側一字流。一、御
花壇御靈屋にて死人三十許。一、五軒茶屋向側新茶屋二字流死人少シ。總死人御調百十六人怪我人二百人許。一、御花壇流七軒
損六軒總ぬれ。一、御靈屋下流二十七軒損五分通ぬれ八分通。一、追廻流七軒損十一軒ぬれ五軒。一、兩中ノ町流三軒殘總ぬれ。
一、中ノ瀬流五軒殘總損。一、川内流四軒損十軒餘殘總ぬれ。一、淀ミ流四軒損六軒殘總ぬれ。一、セイクワン寺渡流一軒。
一、下川原五軒茶屋流四軒總ぬれ。一、若林紙すき町五分通ぬれ。一、中田、長町、増田、今市(以上仙臺市郊外の町村)右橋
[皆]落る。
(荒氏記録)

右大町永井屋源(介方)より石巻へ書狀寫

一、石巻

七月十六日より雨十六日十七日大雨北上川大水、内水ささへ(滞水ノ意)石巻住吉大騒動。
蛇田町(石巻市郊外)半丁水上り十八、十九、二十、二十一、二十二日まで雨、二十三日明より晴。

○御城下七月九日より大雨夜中洪水大橋も痛、殘橋々も數ヶ所家流人死百十人餘八幡堂流木も落□流れ。暮より小雨降

石卷 十五日夜中迄大雨十七日晴十八日大水出、尤雨天、同日鹿又、高屋敷、石卷土手窪所水越し大騒動、十九日も少々雨天、川通土手水越前日の通騒動晝四ツ時一ツ時斗り大雨九ツ時過より晴又降二十二日夜半過大雨二十三日早朝より晴。

以上(高橋氏記録)

文化十 酉年 (紀元二千四百七十三年)

夏季低冷
地震
一月元日(一月三十一日)上天氣。七日晩雪降三寸程。八日より甚寒。十七日迄少々寒。(二十)日雪降。二十一日(二月二十日)明時地震ゆる。二十二日より少々ゆるみ候事。

二月二十六日(三月二十八日)西風大風。
三月十一日(四月十一日)雪降。

六月十五日(七月十二日)雨降。二十六日(?)大風西風日日雨降。

七月六日(?) (八月二日)西風大風。七日上天氣。九日十日雨降。十二日上天氣。十四日十五日雨降。晦日晚(八月二十五日)晚四ツ時半より大雷大雨。

八月二日(八月二十七日)雨。四日雨。六日雨。十四日晚(九月八日)霜。十五日雨降日々雨。

九月六日(九月三十日)大霜。七日、八日霜降。

十一月八日(十一月三十日)晩大雪。九日同斷。

閏十一月十六日(文化十一年一月七日)川通(り)寒(氷)張り大橋(涌谷町江合川の大橋?)上下子供しが(氷)渡り近年覺えなき寒也。二十三日氷一字流。二十六日より甚寒。

十二月二十日(二月九日)曉七ツ時より西風近年無覺極大風所々破損。二十六日晚□大風。

西ノ大暴風
嚴寒
大霜
大雪

十二月中旬より一向雪降らず、二十八日市草履道、正月七日迄、年禮草履道此迄無覺天氣也七日晩三四寸程雪降る。

(荒氏記録)

土用中給を用ふ

六月至而冷氣にて土用中給位にて暮し世上大騒動何モ餓死ト相決候石巻米相場三斗二三升、七月初より暑に相成盆中如土用中大暑閏十一月十四日(文化十一年一月五日)夜大川氷(り)十五日舟不通用、正月五日(二月二十四日)氷流

(流水)不通用(流水甚しき爲め)舟行し得ざる意)此邊□□。

(高橋氏記録)

文化十一 戌年 (紀元二千四百七十四年)

五月十一日(六月二十八日)上天氣。

七月二十六日(九月九日)西風大風。

(荒氏記録)

六月七日(七月二十三日)晝時分より雨降出水甚しく□床□(上)□□。

七月二十日(九月一日)時分より朝暮冷氣來り二百二十日前日小雨大風併田畑の物に指て無障候此砌より冷氣猶在之遅稻(晩稻)清水氣在之猶澤合(ひ)等實乘(稔)無心(許唱)候。八月十四日(九月二十七日)より單物着用の者共在之候□溫暖相出候其前大蟬斗至て稀に聲相聞へ候折も在之候處十五日よりぜわめき(ざわめき?)相出申候昨十四日迄にはかふるぎ、はたおりの聲も聞人稀に御座候。

(高橋氏記録)

文化十二 申年 (紀元二千四百七十二年)

一月元日(二月九日)上天氣。二日大雪日々雪。二十日(二月二十八日)曉八ツ時地震。二十一日晝八ツ時大地震。二十三日氷とける。二十二日まで雪□□中□寒る(凍る)。晦日大雨。

二月朔日(三月十日)晩雪降る。(三月十五日御目付被仰付候事(執筆者))

六月十五日(七月二十一日)□日々不天氣。十七日より□□(養蠶に關する記事ならん)。十七日晚雨降。二十日大蟬出る。

大地震

西ノ暴風

出水

綿入と拾着用

初霜

七月四日(八月八日)五日まで綿入拾にて居、十二日より残暑。十六日晚より二十一日まで雨降。

初霜

九月三日(十月五日)初霜。四日大霜。

初霜

十一月朔日(十二月一日)九ツ時より初雪四寸程降。二十日大雪。雨降。

十二月□□雨降。十八日(一月十六日)大雨。
正月晦日(三月十日)雨にて去冬より(の)川氷消(え)二月朔日川舟通用(行)す。去臘(ホ)ク(ク)時分より正月三日時分まで井水氷正月十八日頃も井水氷。
(以上荒橋氏記録)

文化十三年(紀元二千四百七十六年)

西ノ暴風

一月元日(一月二十八日)雪降。八日朝より同晩九ツ時まで西風極大風。二十九日(二月二十六日)雨降晦日晚まで雨。沼一向さい間(結氷の隙間の意?)なし。

二月二十一日(三月十九日)より二十二日まで雪降。

三月朔日(三月二十九日)上天気、三日同。八日朝より西風極大風所々大損。

四月朔日(四月二十七日)大風。五日(五月一日)大霜苗代へ氷張る。八日大霜。十三日大霜。二十二日霜。

六月朔日(六月二十五日)天氣宜。十六日(七月十日)曉八ツ半時中地震。十八日朝より西風極大□田畑痛。

八月朔日(八月二十三日)上天気。三日大風南風一日一夜稻等には別段不障。六日七土用中より猶大暑。十一日二百十日上天気。

拾着用
暴風害

閏八月朔日(九月二十一日)上天気同日甚冷しく成る拾相用。四日朝六ツ時より大雨同夜四ツ時より西風吹き出し五日曉方大風に成る田畑甚痛。

九月二十一日(十一月十日)朝大霜。

十一月三日(十二月二十一日)雨降。

十二月(の)□ゆき降らヅ(す)いたつて

(以上荒橋氏記録)

當年の作毛(稱)中より上なり

降雪

一月元日(二月十六日)上天気。六日晚雪降。二十九日大風晦日大風。
二月三日(三月二十日)大霜。四日大風。五日同断。六日大霜。十四日大風。十五日天氣。二十九日(四月十五日)晚雪降。

初鮪

三月十二日(四月二十七日)初鮪六本防丸代(?)六貫より七貫まで。

四月二十六日(六月十日)七ツ時より雨同晩降二十七日西風吹。

五月四日(六月十八日)明時より南風雨降る。五日六日手前(自己)田植。

田植
新七月二十六日水霜降り稻損傷す

六月十四日(七月二十七日)水霜降稻浦(稻)枯れ赤くなる。朔日より不氣候日々雨降、九日晚雨降、北上(川)大水にて高屋敷(地名)より名緒(沼)へ押入(洪水が)。二十二日(八月四日)雨降にて向沼大水、二郷(南郷村内)逆水にて□□通痛。十七日(七月三十日)朝五ツ半時過大地震。

洪水
大地震

七月二十日(九月一日)七ツ時より雨降り暮時より小風大雨、二十一日朝五ツ時迄雨風夫れより快晴四ツ時より上天氣田畑には別段障りなし。二十六日朝より秋冷拾等相用不苦候事。

初霜

八月二十二日(十月二日)初霜。

九月十四日(十月二十四日)朝五ツ時より西風吹き大風十六日暮時まで吹く。十九日朝大霜。二十三日四日雨降。
十一月十九日(十二月二十六日)晝八ツ時より雪降五六寸翌二十日晴る。二十日より十二月十日(一月十六日)迄雪等一向不降道々草履道也。日々上天気。

十二月十六日(一月二十二日)雪降。二十八日上天気。

(以上荒橋氏記録)

文化十五年(紀元二千四百七十八年)

雷雨
南ノ暴風

一月 十二月より正月まで雪一向□不降。元日(二月五日)上天氣。二十二日晝八ツ時雨降。
二月四日(三月十日) 晚八ツ時より雨降同晚九ツ時晴。十日十一日甚だ冷え候事。十一日晚九ツ時より雪降る六七寸。十二日同断。去年冬より一向雪降不申候事。十三日大風。二十八日晝七ツ時雷雨。二十九日晚雪ふる。
三月朔日(四月六日) 晚雪降。五日朝五ツ時より南風極大風砂等吹立つ。八ツ半時より雨降。七日晚より雨降。八日大雨。九日晴。

初節晩霜

四月五日(五月九日) 初節。五日寒(?)。十四日(五月十八日) 大霜。二十二日(五月二十六日) 朝大霜。

六月十五日(七月十七日) 初胡瓜用る。八ツ時より雨降。

七月七日(八月八日) 上天氣。六月十五日より二十四日まで一向雨不降。二十四日雨降半時ばかり降。

八月 二十日(は)二日(九月二日) 上天氣。四日より土用より大暑。五日六日同断。二百二十日上天氣。十四日晝八ツ時より少々雨降、十五日同断、十六日同断。十四日より拾。十六日より綿入等以「用え」候事。十七日晝時迄雨降。

新九月十六日綿入着用

九月九日(十月八日) 雨降。十日大雷大雨。

大雷雨

十月朔日(十月三十日) 上天氣。

十一月二十六日(十二月二十三日) 晚大雨、二十七日朝五ツ時晴。

十二月朔日(十二月二十七日) 暮より雨降、二日大風、七日七ツ時より大雨、八日少々降る、二十七日晚雪降、二十八日晚同降る、二十九日雪大□□□□□□。

(以上荒氏記録)

桐の花全部結實

當年桐の實悉附にて枝折る。

十二月二十六日迄雪一向不降甚暖氣二十六日晚より雪降る七日より寒氣甚敷相成堀々沼々寒り(氷)張る。

(以上高橋氏記録)

文政二 卯年 (紀元二千四百七十九年)

西ノ暴風

一月元日(二月二十六日) 雪少々降大風、二日同風、三日上天氣、四日雪降、五日より日々大風。十四日[迄]日々大風。十八日晚より西風吹き出し十九日二十日極大風二十二日同断。

大霜

二月二日(二月二十五日) 大風。二十四日曉七ツ時より大雨二十五日晚八ツ時より降(?)二十六日雪降二十七日同断。

西ノ暴風

四月九日(五月二日) 朝大霜。
閏四月二十四日(六月十六日) 西風極大風。

彗星

五月(十二、三日)(七月三、四日) 西北の方へ彗星出る暮刻より出る。二十日初胡瓜用る。

地震

六月七日(七月二十八日) 晚暮時地震但中通り。

旱天

殘暑甚だしく六月十日より七月六日(八月二十六日) 迄一向雨降らず香水(飲料水) 甚だ不自由。六日晚雨降、七日少々降、八日少々降、九日晝七ツ時より晴る。八日より拾用ゆる。二十日(は七月)十四日(九月三日) 晚雨、十五日西風吹、十六日より日々雨二十五日迄。

初雪

九月朔日(十月十九日) 上天氣、二十七日(十一月十四日) 初雪。

初雪

十一月二日(十二月十八日) 晚九ツ半時より大雪、三日同断、十八日上天氣。

十二月四日(一月十九日) 雨降、七日八日大雪、二十二日晚大雪一尺五六寸降。

(以上荒氏記録)

文政三 辰年 (紀元二千四百八十年)

一月元日(二月十四日) 朝五ツ時より少々雨降。二日西風(以下十二月末まで記事なし)。

正月大洪水十二日(二月二十五日) より二階へ上る。井内町(石巻市内) 水の深さ腰切り、十四日夜門松相納め候に腰迄水相入相納候。

(奥州仙臺遠田郡涌谷高橋玄眞石ノ巻中町松本横丁住と記しあり)

(以上高橋氏記録)

文政四年 巳辛 (紀元二千四百八十一年)

西ノ暴風
連日暴風

春寒

四月末結霜田に結
氷す

潤

洪水

大地震

大雷雨・落雷

初霜

一月元日(二月三日)極上天氣無風、二日晚七ツ時より雨降、三日朝より雪降、同晚四ツ時大風、四日雪少々降、九日晩雪少々降、十五日朝より西風吹き立、同晚は「西風」極大風。十七日朝より西風吹き立、十九日より上天氣、二十七日晩雪降、二十九日大風吹、雪少々降、大風。
二月朔日(三月四日)同斷吹、二日吹、堀々へ氷張る、寒中よりひへる、十三日晚九ツ(時より)大雨、十四日明時晴、同日西風、十五日同斷、十八日雪雨降、十九日大風、二十日同斷、二十三日晩雪降。
三月朔日(四月三日)晝八ツ時過より雷雨降る、二十日晚四ツ半時より西風吹き出で二十一日二十二日と大風、二十五日(四月二十七日)霜田苗代へ寒り(氷)張る、二十七日同上、二十八日同斷。
四月十五日(五月十六日)雨一向不降。
五月(初旬)馬場通(涌谷町内?)呑水(飲料水)不自由、十二日大川メ切。
六月四日(七月三日)雷雨、六日メ切北向押切る。十三日櫻(筒)メ切繕。
七月三日(七月三十一日)明時より雷雨半時斗降、七日雨降。盆中晝夜上天氣。
八月十六日(九月十二日)大地震晝九ツ時。
九月九日(十月四日)晚七ツ時大雨。九月(日)二十二朝落雷二三打續。?
十月二日(十月二十七日)朝初大霜。
十一月九日(十二月三日)の晩大雪十日晴、二十九日雪降。
十二月十二日(一月四日)雪降、二十五日の晩九ツ時より大雪、二十六日雨晴る、二十八日甚寒る(冷ゆる)。
(以上荒氏記録)

文政五年 午壬 (紀元二千四百八十二年)

西ノ暴風大雪
仙臺大火

三十二日間の霖雨

大雷雨

霖雨

暴風雨・洪水

初雪

稲有の大雪

仙臺大火

一月元日(一月二十二日)晝七ツ時より大風、二日晚七ツ時より雪降り、二日大雪一尺程降、三日晴る、二十八日大雪、二十九日晚大雨。
閏正月二十三日(三月十六日)晚四ツ半時より西風大風。二月八日(三月三十日)晝七ツ時より大雪七ツ半時過より雨暮□半時晴、十四日八ツ時雷、十五日朝五ツ半時雨降、二十八日晝八ツ時過より雨降る二十九日迄。
二十七日(四月十八日)晝四ツ時仙臺荒町火元にて門(數)百軒以上焼失六人焼死、同日西風大風。
四月二十二日(六月十一日)より雨降日々の雨。
五月 四月二十二日より五月二十四日(七月十二日)まで日々雨、二十四日晝八ツ時より快晴。
六月朔日(七月十八日)初胡瓜。三日土用入より極暑雨不降。二十七日(八月十三日)大雷大雨引續日々。□□□日雷雨少々降。
七月朔日(八月十七日)雷、十六日晚四ツ時より大雨西風、十七日上天氣南風少々吹。
八月六日(九月二十日)より不天氣、七日雨降、八日同斷、九日同斷、十三日大雨、十五日、十八日、十九日雨降、二十一日、二十二日大嵐大雨、八合水所々表垣大破、二十二日練牛、大柳(何れも地名)ニヶ所土手押切白ヶ筒土筒押切、二郷(南郷村内の大字)砂山土手一ヶ所切。
十月十六日(十一月二十九日)初雪、二十四日晚雨降、二十五日晴、同晚大風。
十一月二十五日(一月六日)寒入上天氣、二十六日同斷、二十七日晚大雨、翌二十八日大風。
十二月四日(一月十五日)晚四ツ時より雪降、五日、六日大雪、七日大雪四尺程、仙臺ハ五尺程、昔より斯様の大雪覺無之八九十に成し者共心得不申由、七日より人馬通用留、二十四日晚大風、同晚仙臺大火。(以上荒氏記録)
十二月五日より雪降り晝夜四五日ふり高サ深き所にては八九尺前代に覺の無き大雪の由老人共申唱る。
一關邊より奥の方は大雪に無之由何れ海邊近き所斗り大雪の由に相唱也。
(以上高橋氏記録)

文政六年 未癸 (紀元二千四百八十三年)

晩雪

一月元日(二月十一日)上天氣、十三日雪降、二十四日晚雪降、二十五日朝五ツ時より大雨になる、同晩暮時晴る。
二月九日(三月二十一日)雪降、十日晴。
三月三日(四月十三日)上天氣、十二日晝七ツ時より雨降、同晩雪降、十三日西風吹き雪少々降る、十四日朝氷張る、二十日朝大霜。

初鮪

四月六日(五月十六日)雨降、七日大風西風也、八日上天氣、十一日晝四ツ半時頃より雨になる、十六日晝八ツ時雨降、七ツ半時晴、十四日初鮪。

洪水

五月四日(六月十二日)大川メ切、翌五日□□□六日晚八ツ時より雨、同日雨降る、六日大雷、七日晚より雨八日同断。

地震

六月六日(七月十三日)初胡瓜用る、二十日嵐、二十一日(七月二十八日)洪水北(小牛田)土手ニヶ所押切。二十四日地震但中の上晝七ツ時兩度。

初霜

七月盆中上天氣。
八月四日(九月八日)大雷西□屋敷大杉へ落る、五日晚四ツ時過□大雷、二十九日(十月三日)初霜。
十月十二日(十一月十四日)上天氣。

十一月九日(十二月十日)晩?曉七ツ時より雪、同晝四ツ時まで降る、二十七日晩より八日朝雪降る四ツ時晴上天氣。
十二月二十四日(一月二十四日)暮時より西風大風。
(以上荒氏記録)

文政七年 甲申年 (紀元二千四百八十四年)

十二月二十八日明時より雨降同晝七ツ時晴、二十九日より上天氣、晦日より草履道、正月元日(一月三十日)より九日迄雪一向不降年禮草履にて候、實に草履にて通用古來□□覺無之上天氣十日晝四ツ時より雪少々降十一日より上天氣又々草履道。

出水

一月二十日(二月十九日)朝五ツ時より雨降同晩九ツ時より雪降る、□二十一日明半(?)より雨降同夜□□時晴川大水、二月七日(三月八日)朝雪降同日晝時晴る、九日晝八ツ時過より大雨大風同晩四ツ時晴る、十二日朝より雪降る

北西の暴風

同晩大風、十三日四ツ時より北西大風所々大破、十六日西風大風、十七日十八日北西極大風、二十日大風、二十一日暮時より雪降、二十二日明時晴、二十四日朝五ツ時雨降同晩大雨、二十五日極大風同晩大風、二十六日同断、二十七日

連日暴風

日晚四ツ時より雨降る、二十八日同断、二十九日少々降る。

三重の日暈?

三月朔日(四月一日)七ツ半時より雨雪まぢり、翌二日明時□□□□、五日同様□□同断降、八日同断晩同断、九日晚七ツ時晴、十六日雨降、十五日(四月十五日)五色雲輪三重に□、十九日大風雪降、二十日大風、二十二日雨。

出水

四月十二日(五月十日)より雨十四日まで、大水出で屋敷へ上り候事、十八日大風、二十日雷起雨、二十二日大風、二十四日九ツ時より大嵐。

暴風

五月九日(六月六日)より大しけ、「三十日」ふりつゝく。

霖雨

六月十三日(七月十日)時々降、十六日より大暑、二十九日雨寒縮入等着。

七月二十五日綿入着

七月朔日(七月二十六日)夜九ツ時大風ならひ、盆中上天氣、二十三日夜五ツ時きり(き)出候事、二十四日嵐増りす暗く

洪水

八月十四日(九月七日)晩方より雨、五ツ時よりコチ大風、十五日十六日晚七ツ時まで□□□□風□□川大水にて南

地震

小牛田へ押切三ヶ所、南川大洪水、十七日南風にて大雨、九ツ半時晴、木間塚(地名)境押切、屋敷へ水上げる。

初雪?

閏八月十九日(十月十一日)中地震。

雷雨

十月十日(十一月三十日)雪ふる。

雷雨

十一月朔日(十二月二十一日)より暖氣上天氣、六日大風、十一日南風、十二日より上天氣暖氣にて春の如く、同日夜の九ツ半時雷嚴敷一聲東へ七八聲(?)大雨大風十三日迄、冬至中暖氣、十八日(一月七日)雨、夜五ツ時南吹(き)雷聲同刻より大風。

舊八月諸國大洪水

日に虹の如き運(暈?)出此年八月大風大雨國々大洪水。

(以上荒氏記録)

寛政年中にも右の如く運出此年も八月より十月まで大風大雨國々大痛の由承る。
八月十五日十六日大風雨稻大痛。
〔今年〕痘瘡麻疹流行。

(以上高橋氏記録)

凶作

暴風被害あり

文政八年 乙卯年 (紀元二千四百八十五年)

一月朔日(二月十八日)上天氣、二日南風、三日大風、四日暮時より雨、五日晝時晴、六日大風、七日(二月二十四日)極々大風にて破損多し。十四日大風、十五日大雪にて十六日大風、大川三四日さい(流水の事)流る。氷る事寒中の如し。二十六日より四五日暖氣。

二月 寒の(如き)風なり、三日(三月二十二日)大風、二十六日上々天氣。

三月三日(四月二十日)上天氣、五日雪少々降。

四月二十二日降雪
七月中旬、陸羽地方に霜雪降る、大寒害
土用中綿入着用

六月稻草生追々無之程の由。二日(七月十七日)南部霜降る。稻大豆かれる。氣仙(宮城縣本吉村)までふる。最上郡大

大蟬啼く
百日紅開花

雪、大豆稻朽(ちる)。土用迄甚(だ)涼しく袷寒く綿入にて居候。其より段々不天氣にて引續き七月(となる)。
七月五日(八月十八日)單物着用致候處翌日より涼しく雨も繁く候、八九日十日上天氣、十二日晚大雨にて大水。過日不天氣にて世上の唱(ひ)饑饉の由。乍去大蟬出る、百日紅花數(多くの意?)咲。二十三日(九月五日)晚雷聲南

彗星

八月上天氣續き。〔二十五日〕(十月七日)南の方へ彗星出る。

單衣物着用

九月二日(十月十三日)大風西風、八日雨、九日上天氣單物着用。二日二郷より早稻米三升持來る、相場新四斗三升

大雪

十月(二十七日)(十二月六日)大雪。

地震

十一月朔日(十二月十日)中地震、二十四日夕雨ふる、二十五日二十六日まで雪ふる。

十二月引き續きて十四日まで降る。

當年より向十七ヶ年目には饑饉に相成候段駝と承り傳へ候間段々に此は可懸心候事。 荒作左工門

(以上荒氏記録)

五色の月暈

十一月十六日(十二月二十五日)夜五ツ時より月に五色の輪まわり色虹の如し、臥頃にはなし、十七日の夜は笠を
めす、十八日より七頃(七ツ時頃?)雨、右五色運半時斗也。

十二月十七日(一月二十四日)夜にも五色輪。

冷夏

六月四日(七月十九日)より土用なり、土用前は暑さも無之、土用に至り暑さになり土用中甚しき暑なり、土用終り
即ち(直ちに)の意寒くなり多(く)は日中斗り單物着用朝夕は甚(だ)寒し、七月初頃より諸人當年の作毛無心元唱候、
米も相出不申様に相成る、日々寒く曇り、六月二十八日にて其後日々曇り、七月六日より日夜九日の夜まで雨な
り、十日(八月二十三日)五ツ頃より天氣よく諸人單物又はカタヒラ相用。 (以上高橋氏記録)

文政九年 戌丙年 (紀元二千四百八十六年)

一月朔日(二月七日)大雪、十二日晚寒中より寒し、十八日上天氣、二十三日(三月一日)大地震、二十七日頃折々
雪降り寒中の如し。

二月朔日(三月九日)雪降り、四日より七日まで雪降り下郡沼水渡通ず(氷上を通行すること)。

三月五日(四月十一日)朝雪晝晴。

八月 三日月如此に劍先立候。伊豫國大洪水にて人馬死。

十二月十九日(一月十六日)雨ふる。

二月十二日(三月二十日)雨ふり十三日より漸く春光の氣を催(す)なり。

十二月二十七日(十二月二十五日)晝より雨なり此夜大雨。

當年寒甚た暖ふ十二月七日(一月四日)夜内かめ(屋内の水瓶)に至つて(極めて)薄氷り始めてはり候、七日に
雪少々降。(註)此記録は石巻にてのもの如し (以上高橋氏記録)

大地震
降雪

伊豫國大洪水人馬
死す



文政十一年 (紀元二千四百八十七年)

地震
 雷・暴風
 暴風雨
 濃霧
 暴風雨
 暴風雨
 出水
 疎植の田上作となる

一月三日(二月二十九日)雷聲大、春の如し、五日より寒氣甚だし、九日(二月四日)晚八ツ時地震、同晚七ツ半時雷一聲、十八日雷、八ツ時より大風。
 二月二日(二月二十七日)より三日まで雪降る。
 八月二十四日(十月十四日)大風。
 十一月二十日(一月六日)大雨暖氣、二十一日大もや(大霧)。
 十二月九日(一月二十五日)晚四ツ時より十日晚五ツ時迄大風、十六日晚五ツ時より大雨大風、十七日の晩方にやむ。十七日大(堀大水にて街道をこへ練牛町へ流る。二十八日(二月十三日)大雪。(以上荒氏記録)
 土用初(始)より中頃まで日々東風殘暑近年に覺なき暑なり。
 世上苗不作也大瓜村(石巻市の北方)の内に極く苗不作にて一本二本づつ植付候(得)しは甚だ上作に聞え候。
 十二月十五日(一月三十一日)晚より十六日迄大雨大風、冬至前四五日の間甚暖氣なり冬至に相成大寒、北上川氷る。寒の入日二十日の明七ツ時分より雨終日雨降大に暖にして氷解る夏川と成る。(以上高橋氏記録)

文政十一年 (紀元二千四百八十八年)

稲凶作
 麥大凶作
 暴風
 大雪・大雨
 出水
 出水
 出水
 大雨・洪水

洪水屢々あり。凶作。麥大凶作。
 一月元日(二月十五日)上天氣、二日大風。
 二月三日(三月十八日)より四日まで大雪、十四日より十五日まで大雨にて川大水、十九日雷聲發す大雨(あられ)降る、二十一日晚四ツ時より二十三日まで大雨、二十二日大水、二十七日(四月十一日)大雨にて川々高水。
 五月二日(六月十三日)より三日大川メ切。
 六月六日(七月十七日)より十二日まで大雨十四日上る、二十二日(八月二日)の曉より二十三日迄大雨大水、晦日

暴風雨

大雨城壁破損、大洪水

大雨・洪水

長雨

大豊作

暴風

暴風雨

八月六日地震

(八月十日)曉六ツ時より大雨大風にて所々に破損。
 七月朔日(八月十一日)まで同斷、二日上天氣、九日より大雨、十日曉七ツ時御城(仙臺城?)石垣崩、同日八ツ時過表一字崩、川大水、九日より十一日曉迄大雨、十二日八ツ時長淵土手六七十間に切る、同日曉五ツ時新丁土手二十四五間程切る、川原丁より田沼丁新丁六軒新丁大水皆屋敷へ上る、河田地一尺程流、(四)十前の者と(も)覺不申候事。
 八月六日(九月十四日)より七日迄大雨長淵土手切る、六日川原丁へ土手出来、二十九日より朔日まで大雨。
 十一月十六日(十二月二十二日)雨もや(霧)、十七日十八日十九日雨ふり。
 七月の洪水にて涌谷長淵土手五十九軒(間)土手破れ。
 冬至十六日(十二月二十二日)暮に小雨、十七日雨、十八日雨、十九日雨。
 土用中日々曇り或は小雨にて十八日の間晴天は漸二日なり。
 七月九日(八月十九日)より十二日まで晝夜大雨、世上大水、石巻も大騒、土たん淵(石巻市内の地名にて現はトダブチと稱す)土手總水越え。(以上高橋氏記録)

文政十二年 (紀元二千四百八十九年)

一月三日(二月六日)雪ふり風あり、六日上天氣、七日雪ふり、八日雪ふり晝より上る、九日上天氣風吹、十一日少々風吹、二十七日大風。
 二月朔日(三月五日)上天氣、七日大風、八日上天氣。
 五月二十四日(六月二十五日)こち風雨、二十五日晚八ツ時よりならい大風木吹折。
 六月朔日(七月一日)より不天氣續き。
 七月七日(八月六日)より大暑、六日迄不天氣。五ツ半時(七日)過中地震其日大暑。
 九月七日(十月四日)八日大雨、九日上天氣。

出水

十一月十三日(十二月八日)晝八ツ時より降大雨にて洪水、十七日晴。

(以上荒氏記録)

去年寒中は甚暖成る寒中にて時々雨降る當正月に至り大寒二月十三日(三月十六七日)迄甚しき寒氣、八月五日(九月二日)二百十日首尾能相過し此時世上安心す。先づ當作は近年に覺無之候大豐年の由在々作り方の者共相咄申候、八日二十日(九月十七日)に大雨大風に有之稻皆かへり(倒れる)申候然し奥稻(晚稻)迄みのり候間さゝわり無之由相聞え申候。

去年世上一體不作にて當春米大高直、去年は麥大不作、其所により種も無之程の不作。

當年四月中石巻にて搗麥一升に六十七文位、當春中上方共に一體米高直世上不景氣に聞得候。

三月十五日(四月十八日)に雪少しふる。

六月世上上作の模様にて米相場段々に下り二斗八升。

十一月十三日(十二月八日)晚方其夜大雨、十四日雨其夜降或(は)晴、十五日降晚方晴、十六日朝降、十七日天氣此夜雨、十八日雨此夜雨、十九日少々雨、二十日(十二月十五日)雨大洪水也、二十七日夜雨。

十二月三日(十二月二十八日)夜大雨、十五日夜小雨次の朝まで。

三月二十一日(四月二十四日)四ツ時より夜八ツ時まで東都(江戸)大火、此砌米相場御藏米五斗火事後百文に三合五勺、燒死人千七百人外水に死候者不知候由。

(以上高橋氏記録)

凶作

文政十三年(紀元二千四百九十年)

天保元年

大風雪

一月 十二月二十三日(一月十七日)頃より正月四日(一月二十八日)まで上天氣、五日晚雪少々降る、六日大風

大雪

雪、七日上天氣、八日大雪。

地震

十二月朔日(天保二年一月十四日)上天氣、夜四ツ時地震、二日五ツ時大地震、朝小雨、上天氣。

(以上荒氏記録)

其年の作のよしあしのためし

前年の八月十五日十六日と兩日天氣よろしき時は明年の麥作よし正月十五日と十六日兩日天氣宜敷時は其年作よろし

右兩日の内に一日天氣不宜時は半作と可心得也

其年の八月十五十六日の内天氣不宜時は明年の麥宜不と心得麥を調ひ可申正月十五十六日の内一日天氣不宜時は其年半作と心得萬事心得備へし

右は無遠ためしに候由

七月二日(八月十九日)より京都大地震八日まで。

八月十五日(十月一日)朝より雨晝後晴れ、十六日雨大南風。

十月 天保元年と改元。

十二月 彗星東の方に出る。(舊一日新一月十四日頃か)

土用中日々の□東風諸人心支九日天氣然し東風也、田草取も拾着致し寒と覺候諸人大に心支候土用終候て極暑に相成り稻大に直り諸人悦思ひの外に世上大不作十二月に成り石巻米一圓(一向)に不出。

(以上高橋氏記録)

天保二年(紀元二千四百九十一年)

四月二十六日(六月六日)大雷にて二匁六分玉位の雹降る。

七月十八日(八月二十五日)大洪水にて二郷屋敷土手押切家中居家馬屋共流候事。

九月二十一日(十月二十六日)天日赤し、二十二日同斷。

十一月三十日(一月二日)曉八ツ時より雨朝六ツ時より大もや(濃霧)。

十二月朔日(一月三日)暮時地震。二日曉七ツ時大雪、十二日夜九ツ時より雨、十四日夜少々もや、十五日夜大もや。

(以上荒氏記録)

去臘より當正月中大寒近年に無覺大寒なり。

地震

濃霧

黄砂?

洪水

大雷降雹

全國凶作

彗星

南の暴風

京都大地震

新四月末突降る
外國船略奪す

備荒心得

大地震
旋風?

雷
旱天暴風雪

北上川水結氷上通
行す

宮城縣のみ凶作
奥羽諸國は中作?

幻日

洪水

冷夏
縮入を着用す

大霜降る

稀有の大雪

上酒屋一驛に一軒づつ 大公儀より被仰出には日本中不作に付上酒被相止候。

二月 石巻中以上の者多(く)粥用(ふ)。

三月十七日(四月二十九日)雨雪なり。

六月中石巻浦(裏)町鴉田屋喜三郎舟門脇(石巻市内の町名) 佐藤屋卯兵衛舟水戸中ノ湊舟右舟何れも登りなり、異國舟に諸道具衣類米少々□(し)とられ候。

七月十四日(八月二十一日)十六、十七、十八日と雨大風大雨、然し作には障り不申、此砌諸人心支其後晴天、二十日上天氣。

十二月朔日(一月三日)晩大雪。

積月(長日月の意)相考るに餓死備には年々心懸(け)稗作り方致し備可申候次にひじきは島へ相願寒中取方。

(以上高橋氏記録)

天保三 辰壬 年 (紀元二千四百九十二年)

二月十一日(三月十三日)雪ふる、十四日大地震、二十二日千石佐太郎屋敷より藁三抱十丈斗り吹き上り誠に不思議有之候。

七月二十七日(八月二十二日)より降り始め(雨?)。

十月十四日(十一月六日)雪ふり。

十一月三十日(十二月二十一日)南風吹。

閏十一月朔日(十二月二十二日)北東の間に大雷。

十二月 四十日斗り上天氣春同様に草履道、六日(一月二十七日)晩大風、七日雪大風、九日雪降り。

(以上荒氏記録)

冬至より寒中大寒なり、雪無之寒明き頃に至り少々降。

冬至半より北上川水、住吉中町舟不通也、此砌雪一圓無之中町舟渡氷上諸人通用冬至寒中一向に無暖日大寒近年に覺無之寒氣の由冬至より寒中雪無之加之寒氣。正月十一日(三月二日)總氷落御穀舟下る。(以上高橋氏記録)

天保四 巳癸 年 (紀元二千四百九十三年)

一月元日(二月二十日)上天氣、三日朝雪降り、四日上天氣。

五月十九日(七月六日)二十日頃朝五ツ時東の方に日二つ出る一つは北の方にならび出る是は風無之印と相見得申候事。

六月二十四日(八月九日)晩より大雨、二十六日大水、北小牛田押切る、玉造川四ヶ所切る、南川二郷村勝田大五郎殿屋敷へ一ヶ所、不動堂(地名)と一ヶ所押切る、上築道通用留。

六月中は不氣候にて袷にて暮し寒(く)朝夕縮入に居候程。

七月十七日(八月三十一日)上天氣、二十日大雨、二十日上天氣、二十日夜五ツ時より大雷、二十一日雨、日かん中(彼岸中)上天氣。乍去七分通出揃二分通(とれ)みのり候由に御座候。

八月 上より米穀所拂致候者共相改食米外一字御買上相成候誠に奥州凶作にて所々渴命(に)及候者有之候事、町々無帳面の(借)家一字相拂候事。

九月三日(十月十五日)大霜降る。

十一月十二日(十二月二十二日)冬至入日雨、十五日大雨もや、二十六日大雨、冬至中は雨もや、至つて暖氣に御座候。

十二月 寒中二日斗雨降る、二十日(一月二十九日)大雪近年に無覺大雪なり。

東方朔占

正月七日晴天なれば萬物吉 曇(る)時は災あり右歲凶。

去冬より正月まで寒、近年無覺大寒也、雪一向無之迄寒なり。

(以上荒氏記録)

麥豐作

備荒心得

早稻登熟
中晚稻不良

果實類豐作

初は麥作不宜なり然る後には上作に出る、近年にての多作云々 但し山畑は上作也里地は雪無之候に付山畑の作に劣り申候

備には蒸は甚宜きぞ中白米にして、ふかし而して後に日乾て備ふるなり、子孫の者備を心懸くる時には右の通りせよ。

次昌公の御咄には飢饉は三二十年に一度五十年に一度來ると古人の申傳なり此心得可有と御咄なり。

六月中に大蟬の聲稀なるは不思議と佐沼郡邊にては諸人不思議と咄候。

當年の作草生へは近年にて覺無之候草生と世上相咄候。

八月八九日(九月二十一日)に至り漸々作の善惡大半(概ね)相定り候由、早稻斗りよく稔り候其余の稻は皆かさかさとなり申し。

梅は近年に無覺程なり申し○梨同斷也。外の果物も能くなり申候。

畑の物 茄子は至つて不作 ○大根は上作なり。

七月下旬に北赤井村の者鎌崎(鎌先)入湯に參り、甚だぶつそふにて存入の日數(予定日數)居り兼(ね)歸る、御城下南方ソツタチ(稻稻垂れざること)。

利府(鹽釜の北西方)は御國にての上地なり當作は上々作と存候處ソツタチ。

稻作によりて不同あり。

村松屋四郎衛方久々(久しく)召使の下人南部八戸者に有之候七月末に八戸へ罷歸り候八月初に又々參り候八戸總ソツタチ種籾も無之候由花卷相場玄米一升百二十文、小豆百五十、粟百三十の由。

和淵村は相應の作の由何れ稻作によるなり。

御城下は他國の者腰懸住居に罷來候輩は皆相立候由聞え候。

利府の地は作毛二分と相連候由相聞え候。

七月初より石巻川(北上川)にて御積立相成居る舟あり、右舟より御穀(被)相揚(被)御拂候、八月初に御積立の舟川

口を相出候て沖にかかり居候處に右舟又々川へ相戻され候(後に再出)。

八月十五日(九月二十八日)米問屋より新米六升調へつき(搗)候處に五升一盃に上る、一升に付玄米五十五文の由。

八月朔日に上方より下り候者の咄に越郷(越後?)より上は上作なり、越郷より此方不作なりと云々。

桃生(郡)福田村の者の話に來月十八日迄の田刈に候それ迄は實(稔)の善惡は知り難く、夫迄の天氣斗りよく致度と云云。

八月十四日在々にて直買米一石五切り又五切二百文になる。

高屋敷(石巻市内)の者に米調方八月二十日頃頼候處此砌相調には一石六切位より六切二百文位に相調候由。

八月二十三日(十月六日)本町(?)屋にて高屋敷より一俵三切にて調候。

二十四日には六切一朱になる。高屋敷にて。

九月初日(十月十三日)に新米一斗七升位。

九月二日に寒搗白米一俵一切半と百七十文にうれる。三日四日頃より新米一斗六升なり。

九月初に越後より來る人云ふ、越後は上作なり米澤より不宜といふ。

九月に至り少々新米出る、人氣大に宜し。

九月中旬に南部より門脇南部藏屋敷へ書狀に南部當地の米相場玄米一升二百三十文、濱通り三百七十文。

石津(石巻)本町榭屋より伊勢參宮云、九月中旬下向。箱根より奥地不作信州甚しきソツタチ。美濃尾張京大阪四國

萬事宜し。仙臺御城下一番にもさびしきと云云。

國分町(仙臺市内)商人宿はたご賃三百五十文、道中筋は大體二百五十文位のよし。

十一月十日(十二月二十日)頃玄米一切に付一斗四升又三升半なり、白米一斗一升。

十一月二十四日白米一切に付一斗八合、餅白米一斗三盃。

十一月 本町(石巻市)日野屋源(?)地より來年秋まで施米出る、一人に付二合半積り。

石巻物持共寄合御施米出る。

十二月初より御拂米出る。七日(一月十六日)より一斗四升に上る。來九月まで相場一斗六升。

市中相對調一斗五合位、但し玄米也。

十二月十二日に御郡奉行中津川武藏殿石巻表へ來り秋迄定宿。

石巻浦向へ極難の者共へから麥一斗也被下置候。

浦向へ表家の者共へ糶一俵つづ被下置候。

村上屋清衛、津國屋升左工衛門、眞野屋茂衛右の者共施藥致候醫者二三人相願右醫共へ藥遣す。

七月初に石巻町内にて少々も米持たる者より玄米或白米にて組頭へ相出し組合へ拂に出る。七日(八月二十一日)より上より御拂米出る。御藏に米無之此砌大舟へ積置き、川口不宜、出舟控へ居る舟より御穀被相上げ、米問屋へ被相下ケ、人一人に付一升五合つづ相拂はれ候直段一升に付六十八文なり。

七月白米一切に付二斗、玄米一石三切半二百文位或一石一兩位、住吉の者赤井(地名)にて一石一兩一朱と百三十三文に調ふ。

白米一升百文なり或九十六文もあり。七月に御拂米出る。一升六十八文なり。二十三日(九月六日)御拂米出る。

八月米問屋相場一石は一兩半に又上る。

八月八日(九月二十二日)の頃に新米問屋へ出る相場三斗五升。十二日には二斗五升に浦(裏)町(石巻市)米問屋にてハカル。

八月二十日頃より白米一升百十四文もあり百二十文もあり、高屋敷邊にて白米一升百二十五文に賣る。

八月二十五日(十月八日)に至り石巻にて白米一升百四十文麥は百文。九月に至り麥一升百十文或二十文。

冬至中近年無覺暖也。

玄米一斗八升より七升五合七升六升(合?)、白米一斗三升、大豆一升七十文米問屋相場一斗六升になる小豆一升百八十文より二百文まで(十一月末頃?)。

大豆一升九十文より百文まで(十二月初?)。
小豆一升二百二十文位玄米一切に付一斗より五合位まで。
七月二十三日(九月六日)在江(田舎?)の百姓の咄に此日々の雨にて稻の花黄色にさいたるありと云云。
二十日(九月三日)夜雷雨、二十二日朝五ツ時地震。
土用入口時分に一二日大暑其後冷氣二十五六七日(九月八日、九日、十日)大雨大洪水甚冷氣日々曇り時(に)小雨單物着用の者甚稀なり、世上大騒動。七月五日(八月十九日)などには單物に拾にて宜し、八日天氣になる、九日曇り小雨然し夜も蒸しなり此夜月明に星現はる、十日青天白日なり諸人大に安心。又日々曇り或小雨然し晝夕蒸し時々は日あたり、十八日此日終日青天なり、十九日朝より小雨なり風は東風氣なり、二十日夜大雨、二十一日曇小雨夜雨、二十二日雨、二十三日天氣、これより天氣打續き世上安心、晦日(九月十三日)などは單物になる蒸し候。八月四日(九月十七日)より寒し、奥通りは青夕チの儘にて御田地見相入候由、大瓜村の者の咄に當作は五分の作の由、八九日の説に御城下より石巻迄の内に甚不宜所は矢本村なりと云ふ。桃生郡福田村の者の咄に桃生は南の方は五分の作にもなるべきか、北方は三分にもならぬと云。十日に高屋敷村の者咄に一體の作毛は三分の作に成り兼ね候と申事に候然し段々後に相成候ては此度は在々作り百姓(小作人又は自作農の事ならん)は大豐年、大作人程豐年なり、在々にては當年はだまされ豐年と云ふ年なり。不人情なる百姓の咄なるべし。今一年右様の年あらば土藏をも作ると云々。

石巻より出る衣類諸道具等皆近在(日々馬にて調ひ歸ること夥しきなり、御上より石巻小前の者(貧者のこと)への御手當御仁心は筆紙に盡し難きことなり。

- 一、米二千俵 南部信濃守様 一、同三百俵 天童織田様
- 一、同三百俵 小南部様 一、同三百俵 米津米津伊勢守様
- 一、同千俵 津輕様 一、同千俵 米澤上杉様
- 一、同五百俵 新庄戸澤大和守様 一、同三百俵 山形秋元様

稻の花黄色となる

地震

大雨・洪水
冷温

だまされ豐年

一、同五百俵 上ノ山 松平山城守様
六千二百俵

右之通此度仙臺様へ被進候事。

(以上高橋氏記録)

天保五年甲午年 (紀元二千四百九十四年)

荒氏の曆には記事なし。以下高橋氏記録なり。

正月に相成り石巻浦向へ極難澁の者共へ麥等上より被下置候。

米相場石巻の在々へ相入り相對調一切に付一斗五合もあり一斗一升も有之。

御拂米も一斗三升の御相場也。極難澁の者へは裏町御藏にて御本穀にて一斗六升相場なり。

大豆も時には御拂相成去語(舊臘のこと)には餅米も御拂相成る。久圓寺(石巻市住吉の法華宗寺院)に乞食小屋か
かり病人の乞食共粥を與ふ。

小淵村邊は白米にて七升五合位。

二月に相成り米少々下り。同月中旬に至り一斗三升位に成る、段々在郷の米持共より進[□]申[□]出[□]し。

同月下旬に至り白米一斗一升位。玄米一斗三升四升或五升もあり。大豆は一升八十文位。

三月中旬に至り玄米一斗五升位白米一斗二升位、玄米一斗五升六升まであり。

南部殿上方にて五穀調、石巻川へ相入り同所よりひらた舟(舟の型名)にて南部へ被遣候。

佐竹殿上方にて大根、ヒキナ、大麥、小麥等調へ、石巻川へ相入り同所より若柳までひらたにて送り同所より秋田ま
で駄送。

南部公御調米大豆類肥前の佐賀と申處御調也、大豆に巻懷食鏡に出たる蠶豆なり、ナタササゲ(ナタマメ)の大きさ也。

六月中最上、新庄、戸澤大和守殿へ此方様より米五百俵被進候戸澤殿より勘定奉行一人考役一人足輕十人參り住吉御
藏にて相渡し一日に百俵づつ五日に被相送、廣淵町通り尿前(岩手縣)迄御手前人馬にて被相送、同所より戸澤殿方

にて新庄まで駄送の由。

南部、秋田、津輕より乞食に相成り仙臺へ參りし者多し。

戸澤殿役人并足輕以下十六人御城下宿屋より道中驛の石巻旅屋共に入料(入費)皆御手前様より御馳走なり。役人共
は加賀屋三右衛門宿、足輕共奥州屋久作宿。

五月八日(六月十四日)九日時分(頃)より大暑。麥は六七分の作の由。

米相場石巻問屋一切に付一斗六升の處六月始より一斗四升五合に相成る。麥は此砌一切に付一斗二三升。麥は半作。

七月十日(八月十四日)時分石巻雜穀小賣商人方にて今年麥一升百文位。

代相場一切に付一貫五百文是去冬よりの相場なり。

七月下旬に至り在々より米大に出る。二十六日(八月三十日)に横町(石巻市)小米商人福村屋與四郎方にて米問屋

より上米一切に二斗一升と二升とにて七俵相調候由相聞得候。

麥も米問屋より一斗七升調候由。

七月二十六日に浦(裏)町米問屋にて新米一切に付二斗也。

七月二十八日新米問屋にて二斗三升にてひつぱり(分取り合ひにて買ふ意)。

同月二十九日少し東風にて少し雨也、八ツ時より青天也風也南になる。

此節石巻門脇米問屋共方にて相場より一二升も安くせり、安く賣る也。

八月朔日(九月三日)東風大風なり稻には障り無之候。

同月五日に百姓に承り候處奥(晩)稻もさね(實)かたまり致候由。

大根は大作なり、南境村などは少々おへ(生)候大根も皆かれ一圓無之由。

八月十日時分新米二斗五升右の上米二斗二三升。去々年米二斗。同月十八日米問屋相場古米上米二斗五升下米二斗八

升迄の勘定なり。

八月十九日米問屋より中町門脇兩役(所)前へ米相場張札出る、新二斗八升古二斗六升。

北上川結氷

氣候順

凶作

無雨雪
河川枯る

濃霧

太陽光を失ふ、風

五月三日大霜苗代
結氷

大地震、續震あり

雷雨

九月初に至り新米三斗一升古米二斗八升。

同月十三日(十月十四五日)新三斗五升。

十一月上旬(舊一日は新十二月一日)米相場三斗八升。本月下旬に北上川氷る。大瓜村新舟渡舟道斗り明き。

十二月六日(二月四日)七日甚だ暖氣。十二月初浦谷米相場四斗七升の由承候。十二月初米一升上り三斗七升(石巻相場?)。

土用十八日の間一日も曇無く炎暑也十有年來の暑なりと云ふ、六月五日(七月十一日)より無雨、七月八日(八月十二日)の夜雨降るなり、畑に一寸斗しめる、十二日雨、其後共によき時分には小雨して殘暑甚し、二十日前後に新米出たり、上米なり、當作毛近年にての豊作なり。
(以上高橋氏記録)

天保六年(紀元二千四百九十五年)

凶年の當年より三ヶ年目に存候油斷有之間敷事。

二月 米相場四斗七升、大豆は一升到付二十八文。十七日(三月十五日)七時半時より大風、十八日まで、二十五日晚大雪、二十六日七日迄ふる。彼岸まで一圓雨雪不降堀川堤水一圓無之事。

三月十日(四月七日)前より大霞追(ひ)舞(ひ)無天氣もやの如し、十五日頃朝日白く銀の如し、四ツ時まで光なし。十四日大風大雪。

四月六日(五月三日)朝大霜、苗代しが(氷)張る。種蒔等は相止め候(不申しが相)落(十日)待蒔候。二十八日蠶生る。

五月十二日(六月七日)より切起し(田?)ふみ方取まわし(麥圃?)。十五日大雨。十七日五拾刈(地名)初田植。十八日切起し田植。十九日同所植仕舞、二十一日じゆうねん植。

六月十日(七月五日)田の草一番(取)、十七日總仕舞、二十五日晝八ツ時大地震其夜二三度、二十六日少々つつ晝夜、二十七日五ツ時過二度暮時三度四十四度、三十日(?)四ツ時雷雨大雨。

中地震
拾着用
鶴鳴く
馬念佛を唱ふ

八月二十八九日の
暴風雨、大洪水

地震

暴風雨

大地震

彗星

降雪

嚴寒大雪

地震頻發

凶作實狀

七月十二日(八月六日)中地震、盆過より不氣候給にて居りし程、世間又凶作の唱、七月中二本杉の通にて鶴の鳴くを聞く□しからず出来誠にふしぎの事にて、又仙臺片倉小十郎様馬に乗被居候處馬(場)中にて□□南無阿彌陀佛といなきし由、此後是如何様の義出来哉と相咄候事。

閏七月六日(八月二十八日)晝頃より嵐模様にて、七日大風大雨近年に無之覺大風(に)相成同晩大洪水にて新町は不及申本町中通□□不申共□□三丁(練堀町)様の上へ上り□□□□百年二百年にも無之覺大水の由に有(之)候、二郷御知行本地(三)日かぶり(三日冠水)、新田四日かぶり申候。十九日(九月十日)曉七ツ時中以上の地震、二十日曉七ツ時半時同、二十二日曉八ツ時頃より雨明方より大風大辰巳過る七日大風同様。

八月五日(九月二十六日)大地震、二十三日夜西北の方に彗星出る、二十四日ぢうねん刈り取。

九月十四日(十一月四日)大風雪等降る。

十一月三日(十二月二十二日)冬至より意外に寒氣甚敷大雪近年に無覺義に御座候。(五)日又々雪降りいたし(十)ヶ年以前の大雪よりも多候由に御座候、寒氣は近年無之甚敷御座候、地震も冬至中より寒中四五度ゆる。

十二月(一)日(一月十八日)南川氷はる人馬共に渡る。九日頃より少々暖氣に相成事、一寒中は近年に無覺嚴寒に御座候。

右年水損不同にて有候(共)一統七月中大嵐に付不熟上郷邊は上作にて二升□□より一升位迄有之、新田(相半得候)、馬橋、南郷、谷地村迄は水損にて上作にて一升五合位二郷村杯は皆無同様有之事。
(以上荒氏記録)

去冬至中北上川氷る、正月十二日(二月九日)に氷落る、去冬より雨雪無之春に相至り在々の井水不自由に有之候由、右に付き麥も至つて不宜、正月二十九日の夜雨降る。土用中二三日暑にして日日小雨なり、土用明き候ても日々小寒く日夜不天氣なり、二十五日(七月二十日)より晩方より次の朝五ツ時過モヤにて曇り段々に天氣になり暑に成る、二十六日などは夜まで大暑なり、二十七日大暑なり。此砌は四十日早稻はこごみ(屈する)候由也日ノ下(早稻の銘柄?)は稀々出(出穂)、今日は昨日まで出ぬ餅(糯米)は今日は出(出穂)候由、二十九日の暑は炎暑なり夜中とともに同斷也日日なり。

大地震、土蔵破損

地震

閏七月五日（八月二十七日）朝斗「り」雨其後暑也（この前後の天候等は後に詳記しあり）。六月二十五日（七月二十日）晝八ツ時大地震、此夜三四ヒ「度」小地震、二三日の間時々小地震、七月十二日（八月六日）に地震中位の地震なり、石巻并御城下の土蔵とも大丈夫の作事程破損有之由、四十二年以前（寛政六年）正月七日（二月四日）の地震よりは格別緩し。二十五日の地震「に」石巻瀬戸物店大痛。

去冬より日照り也、當春に至り益雨無之在々に種の漬方（浸水）に困り候村々有之、五月田植に至り村々高田に仕付なく有之、同月三十日（六月二十五日）より其後雨なり、右雨にて仕付宜し。

麥上作
一日一夜の暴風雨
被害あり

麥作 去冬より正月迄の咄には麥は不作の由相咄し候處、其後麥作大に直り甚だ宜し。四月實入りの砌一日（舊四月一日は新四月二十八日）一夜大風雨有之右にて麥一字かへり諸人此大風雨にて麥作は大違の由相咄、六月に至り右かへり候麥も引上り、かへり居り候麥迄にも能く「實」のり、上作に候由作人共相咄。六月に至り日日小雨、其間にも大雨あり、右にて麥大に損す、先づ四月の一日一夜の大風雨無之候はば近年にての上々作の由。

閏七月六日（八月二十八日）七日の御城下大洪水「は」御城下初ての洪水の由に御座候、同月下旬に相成り御城下重立つ一人より申來る。

大洪水

家數二百八十九軒流れ土蔵其外の家は不交、居家斗りの調なり。

死人の義は下句迄に總調今に不相知、追々承り候處流家は人家にて六百軒斗り、死人は百六十人斗り、諸家財は常州鹿島へ上る。

御靈屋下御小人九十七軒の内九十軒斗り家流るる。

六月 去月下旬より日々曇り小雨日夜なり今月二十二日（七月十七日）より暑、二十四日雨東風、二十五日同、二十六日暑。

閏七月二十日（九月十一日）に大瓜村老婦やき米賣に參候咄に、燒米に早稻を扱四升より一升と少斗り相出候、餅は扱五升より一升一盃斗り相出候、米性も至つて不宜候。

横町（石巻市）富永屋娘八月二十三日に荒湯（鳴子温泉場中の一湯）入湯に參る、二十八日（十月十九日）九日大雪

十月中旬
鳴子大雪

日本七不思議

也寒きこと寒中の如しと云々。同所にての咄にも八月右様の大雪は覺無しといふ。

江戸表の説に日本に七つの不思議あり、

仙臺の大洪水

勢州桑名の大不作、大川一つ隔て尾州豊作なり

遠州濱松の火車一軒も不殘

津輕六月大霜降る

越前侯御親子同日に卒去

信州松代六月大雪

鍋島の城二ノ丸焼失

七月 土用中暑至つて不足、十二日（八月六日）地震、二十五日の地震には石巻瀬戸（物）店は大痛なり。十七日より

雨、十八十九日夜大水、十九日には蛇田村大土手危き「く」大にさわぐ。二十三十四日より日夜大暑。

閏七月 又六日（八月二十八日）七日の大風雨にて相場上る。石巻出来一圓無之。

八月二十三日（八月十四日）彗星西北の方「に」出る。

九月 津輕も半作の由。

十一月二日（十二月二十一日）大雪、北上川氷る。冬至入口大雪大寒老人も無覺事也。南境村舟渡水の上往來馬渡る。

土用中二三日暑にて其餘は衣服を出干し致す日は一日もなし、日夜小雨或大雨東風、諸人作毛無心元其内に作り方の者の云ふに、今此天氣は反て宜し、稻への虫付無之者なり土用後は大事なりと云ふ。二十五日より暑なり夜も裸にて臥なり。これ日日夜々なり。閏七月五日（八月二十七日）東風氣也雨、飯後より晴天暑になる、此夜雨。六日少々東風なり晩方より小雨夜に至り大風大雨。七日つづいて大風雨晝九ツ時頃雨小降り風靜なり八ツ時頃風止み。八日天氣なり。九日飯後より大雨晝より晴晩方より小雨夜も同じ。十日東風變はり南になり朝より天氣暑なり。十一日晝より小雨少々夜同。十二日朝より小雨夕に晴夜中ふる。十三日晴天暑なり。十四日晴天。十五日同。十六日同然朝夕は二三日寒し世上不安心。十七日同。十八日同。十九日同寒し此夜小雨。二十日東風。二十一日南「ノ」氣なり晝より霧雨少々此夜九ツ時時分より雨晝八ツ時頃より風雨止此夜溫暖にして蒸し。二十三日朝より天氣單物着用。二十四日同

土用中の日々の天
氣概況
八月二十九、三十
日の大暴風雨

大雪、北上川氷結
嚴寒水上人馬通行

彗星

地震

洪水

一日一夜の暴風雨
家屋小破藪被書あり
山津浪あり

八月二十九、三十
日の大暴風雨

縮入着用

南の暴風

晩稻見直す

断。二十五日朝雨後天氣。二十六日天氣なり。二十七日雨。二十八日天氣。二十九日天氣。八月一日單物。
七月六日頃は南境村などは奥(晩稻)も出揃(餅(糯米))はこみ。
一日一夜の大風雨(八月二十八日?)家々小破損多し、諸人右様の風雨無覺と云々、然し作毛にはさのみ無障云々、
然し其村々には山洪水にて大痛あり。
當年の仕付より申分無之豐作に相見え候處聞七月六日(八月二十八日)七日と晝夜大風大雨^東也諸人無覺大風雨な
り、七日の晝八ツ時時分より風止天氣なり。十三日より天氣打ち續き宜し。此風雨稻には思の外無障、山洪水の所は
別段なり、大體稻も花納りたる時なり、花盛りの稻は再び花咲き、然し十五六日(九月六七日)頃より朝夕は至つて
寒し、諸人取々の騒なり。稻を見るにシイナ(糞)多しと云(ふ)ものあり、何れ半作にも成る乎と云(ふ)。又人によ
り當月中たとへ朝夕寒くとも日中のみ暑き則(時)は實のり有之ものなりと云者もあり、何れ善惡は當月終り來月初に
ありと云人もあり、此砌は新米出づるなり。十七八日此砌農人の云に此大風雨に稻には思の外さはり無きと思ふに今
に至り奥稻を手に取り見れば糞穂多(し)と云々。何れ當年作は奥稻は實のり心元なしと云人あり。十八日十九日の朝
などは縮入にて心よき程なり八ツ時時分より少し暑し。此の日の咄に農人ども云ふ奥稻は用立不申、何れ五分作に至
らば宜しと云々。二十日此日は二百二十日なり、朝飯後過までは寒し其後は暖なり、此日などは花咲き居ると云。二
十二日中位の風雨なり、風は思ひの外の大風なり南なり、晝八ツ時頃より風雨止、此夜暖にして蒸なり。二十三日單
物着用なり、此天氣如此の六七日續けば實のり候と云々。此日前谷地村近所の農人云ふ、如此騒ぎ候作に無之石卷の
輩在郷に入込直段にかまい無之何程成りとも拂吳候様に申(す)に付右様に直段上り候、一斗が九升位まで賣るものあ
り。
二十六日(九月十七日)此間の天氣にて先頃中一圓こみふし(倒伏)稻格別に直りこみ候由。二十九日諸人云ふ
晩稻は十日以前とは大に違ひ實いりこみ。八月朔日(九月二十二日)日中單物着用。去月二十日時分に晩稻こみ
不申ソツ立の様にて世上無何(なげ)さわがしく石卷出米一圓無之町人共在々へ直買に相出一斗四五升迄も大上り、天氣日日
宜く晩稻何れも實のりこみ諸人安心。

以下三行不明。

九月に至り思の外不作。

石津(石卷)より在々へ米買如雲。

閏七月二十四日(九月十五日)二十五日頃は一斗五升到調候もあり一斗八升到調候もあり。是玄米なり。

(以上高橋氏記録)

天保七年(紀元二千四百九十六年)

一月元日(二月十六日)上天氣西の風吹く。彼岸まで残雪畑に相見え申候。

二月七日(三月二十三日)早種漬る(早稻種水浸の意?)。十六日(四月一日)曉方より極大風吹、同□□迄吹く。

四十(前後)の中老無覺候事。

二月二十七日(四月十二日)麥切かけ、唐きみふせる。

三月二日(四月十七日)初種あげる、三(日)總あげ、十三日(四月十七日)まで大風、何も種蒔六ヶ敷見え申。

三月十二日(四月二十七日)二十日大豆蒔。十三日初小豆蒔。十四日初□蒔。十五日種蒔、十六日同断。

四月一日(五月十五日)麥二番切かけ。十二日頃より引續き不天氣にて凶作の唱御座候。二十五日(六月八日)六日

大雨。二十六日代かき一番仕返し。二十四日初田植。二十八日上天氣(註四月十二日以來惡(氣續きなりし様なり))。二十九日より大麥かり。

三十日(七月十三日)本地田の草取り、同日より冷氣に相成縮入着用候事。

六月 世間一統凶作の唱にて米相場相對にて二斗より一斗五升位に有之候。二十日より少々暑氣相催候。二十一日同

断。二十七日(八月十日)より二十九日まで暑氣にて單物にて居候事。

七月朔日(八月十二日)より又々寒く相成拾着用候事。二日同断。三日同断。稻は二節(まで)少々本孕致候、中出

(中稻?)よりは一圓本も丸み不申候。七月早稻(銘柄?)「不シ不山本キ」(「房くほき」にて房)申候。十二日八ツ時

頃北の方に雷神座候、同夜五ツ時東南の方に同断。十八日晝時大風、七ツ時より大風にて同夜同断。十九日快晴誠

暴風雨
稻被害

に以て是迄無覺大風、川々八分通り出水、稻等大に痛み候由に御座候。二十日より時々大雨、不氣候に御座候。二十二日(九月十日)上天氣。

八月二日(九月二十日)少々嵐の催。十九日三日大根蒔き。十四日より大麥蒔き。二十六日(九月二十日)麥蒔上る。九月十二日(十月二十一日)□□□□松大雨。御上下邊(御城下邊?)は六分通りの出(出穂?)の(有様相見え申候一圓不熟。十六日の晩大雨。上道通□□九分通□(穂)一分通り實入候様に相見へ申、米相場二郷にて七升位、涌谷八升、上よりの御拂一斗二升。

大霜・結氷
暴風雪

十月十三日(十一月二十一日)朝大霜、氷五分くらい張り。十五日より稻刈取り初む。二十五日(十二月三日)大雪大嵐。二十六日同断。二十七日同断。稻刈三分通り刈上。

饑饉生ず
大根三千本盜まる

十一月 冬至中雪不降誠に暖冬に御座候、所々渴命者共數人有之、上よりの粥被下候。二十二日晚留守中大根三千本斗り被盜取候。

(以上荒氏記録)

一月九日(二月二十五日)に井内(稻井村)小川より大川通(北上川)氷落る。冬至の初より大極寒正月迄近年に、覺無之候。七月二十二日(九月二日)上より御拂米出る、一人に付一日に一合五勺積り一切に付一斗七升の割。春中より雨多く、六月土用に相至り寒く、土用前に單物着用の日一日に有之、土用に相至り單物に給着用也、諸人大に心支、右に付石巻出来無之二斗二升に有之候處に(よ)り一斗八升に相成候。麥も近年に覺無之上作の由に咄候處取「入」見候處去年よりも不作の方に相成候。

六月八日(七月二十一日)晝後より小雨也夜中より大雨なり。九日雨也、十日曇、十二日晝より少「し」晴天又曇る、此夜より南氣に成り少々蒸なり。十三日晝より單物着用又夕より東風寒く、十四日雨其夜雨、十五日雨四ツ時頃より晴又雨此夜雨なり。十六日夜中より大雨晝後に晴れ又晩方雨。十六日に作り方の者云ふ、稻は随分宜し、水も土も冷えぬなり、後天氣に成り候へば案するに及ばずと云ふ。世上此砌恰に單物、蚊も出ず蚊帳も用不申候家多し。十七日天氣なり然し曇り多し。十八日曇晝より天氣。十九日漸々天氣に成り單物と申す程の天氣になる。二十七日當年の暑なり百人は百人まで單物。

九月九日初雷

七月朔日(八月十二日)小松村には四十日早稻出で候由、二十七日よりの天氣暑にて世上大に安心、在々作り方ともに安心。昨二十九日(九月九日)に四ツ時過ぎ迄雨に雷聲あり當年に至り雷聲の初なり晝より暑。

庶民憂擾す

八月朔日(九月十一日)小雨晩方より中雨此夜雨。二日大東風寒し雨なり夜雨。三日雨四ツ時頃より天氣なり風南になる。四日四ツ時頃より天氣。五日六日折々少雨暑く蒸し、稻大にもて候には無心元義無之候由然し出来一圓無之。此砌雀しらす(稻の銘柄)出揃ふ、日の下(稻の銘柄)半ば出る。十日十一日東風寒し。十二日より宜し、此砌咄に早稻、中稻、晩稻までも一同に成(生)り出候由に相聞え申候。十日晩十一日晚蛇田町新田町集會にて時の聲等相發。十五日此の日暑、これ迄なき暑なり。南境村稻出不申今二三日經候て出可申。十六日相應の暑なり。

八月七日(九月十七日)朝夕寒し。此砌稻は一字出揃ふ然しコゴミ不申カサカサ多し。此砌の説には登米佐沼は宜し、第一に石巻近郷、三鹿又は至つて不宜なり。(第二番目の地名欠?)
五月中より寒く、土用に至り寒し、諸人大に心支日々小雨曇り。十三日(八月)(九月二十三日)に晝より單物着用、又此夕より東風寒く小雨なり夜小雨。十五日雨、十六日雨、十七日天氣、十八日同、十九日天氣に成り單物と云天氣になる、此夜より星を見る。二十二日は百人が九十人までは單物着用なり。二十七日(十月七日)當年の暑なり。

(以上高橋氏記録)

手跡異なる記録(其一)(高橋氏曆中の綴込)

秋田領最上領作毛宜し仍て此地に(へ)離散するもの多し。
四五日以前に見る(し)に此稻は一向(皆)實入れるにつきと思ふ(へし)に、今日見るに白水如乳あり農夫の輩云ふ高屋敷村の事にていたせば三分位の作なるべしといふ。上に於ても今に御見濟み(見當)無之者と相見え、糶屋(こぼり)屋、濁酒屋共に御觸無之、此砌南部盛岡より實便あり同所米相場一斗一升なり然し段々に少々下るべしといふ。十三日(七月)(八月二十四日)次江村の農夫云ふ今日は彼岸の中日に有之今稻の花咲くなり如何んか知れさると云々。

十四日昨夜半より東風雨大吹き今日日本町猷屋にて在郷より賣米玄米にて一切に付五升五合調、過る十一日に涌谷(へ)

暴風雨

北上川大洪水

毛(火山毛?)降る

日蝕

米調遣候處八升位にて無之候、麥は一斗位なり、今に世上にて見濟(見當)立不申、當月下旬に成り不申候へば知不申候由。

十六日雨夜中大風雨。

十八日(八月二十九日)北上川大洪水、二十日御看藏御役人田中喜膳殿下る、御(城)下米一升二百三十文なり。

七月中毛ふり候處高城松島邊迄ふり御城下邊は二尺以上の長サ迄ふる。一丈以上ふりたる所あり。

六月初日(七月十四日)に日蝕有之御城下にて見候もの多と云々。

十九日(八月一日)少々米下り模様相見え在々にも石巻よりの買人大に不足なり反て在より賣人出る。大瓜村の内

井内(稻井村)より、鬼首(玉造郡)、迫(栗原郡)の邊へ参り歸る。鬼首邊は五分通、二ノ迫は至つて不宣、三ノ

迫は五分通乎。

二十日玄米六升五合餘に迄相成る。

二十一日新米米問屋に出る、横町野村屋にて一斗五升になるか。後承に新米一斗五升は偽なり。

石巻門脇町南部藏屋敷守に出會承るに南部領も思の外の不作なり花巻は當地米相場一斗一二升盛岡は一斗より九升位

まで。

二十四日玄米七升五合になる、稀に八升到に調候者もあり。

九月四日(十月十三日)石巻御拂扱有り一人に付一合五勺なり、一升到に付直段五十四文也。

いよ／＼作毛不宣在々の御百姓共も見詰よりは大に米不相出候。

去月中横山の大肝人大森清八郎御城下に願に登り願の品々扱の村々へ御拂米被下度申出候に付罷登候處御郡奉行より

被仰渡候には御國中御城下相除き千八十三ヶ村あり御拂米は如何様の儀候とも難相成候只石巻は別段の由被仰候也。

五日此頃日に相成又米不自由に相成る六升到に賣不申思の外に田より米相出不申。

十一日米又上り白米一升三百二十文なり。

鬼首邊、玉造、加美郡、栗原、一二三迫、一ノ關大不作。

大根葉餅を作り食す

九月十五日(十月二十四日)餅(大根葉餅)作る。

(作り方)大豆粉三杯、麥粉同米粉二杯、右取合せ湯にて練り餅として又右をゆで。大根葉を切り煮て水にてよく洗へ右を搗きて其後、右の餅と合せつて爲餅、大豆粉を爲し衣用ゆ又汁餅にも爲す甚だ宜し。右の青葉よくしぼりて二升餘入れ四人にて用えたり。

十八日御拂米出る一人に付七合五勺。

九月二十七日誠以て不作百姓前(共)も去月中の見濟とは大ひに違ひ田より出米無之由、天明年中の不作よりは大きなりと云ふ、天明の年は一切に五升一盃は次の辰の年四五月の間ばかりなり。此度は前年の秋九月より五升一盃なり。

石巻表井に在々共に一切に付在々は五升なり石巻は五升一盃なり。

新米は下米は七升五合より七升位の者なり。

十月六日(十一月十四日)御拂扱あり一升八十六文。此砌は市中相場玄米一切に付古米四升三盃位、新六升より七升位迄至つて悪米なり。

八日より石巻中へ御拂米出る一丁(一町内?)に二人其人物被相選拂所被仰付候、本町は堺屋日野屋なり、日々拂なり、一人に付一合五勺なり、七升相場なり代相場一ノ六百文なり。中町酒井屋忠衛阿部半右衛門、裏町は山口屋甚(郎)新田屋庄助。

此度の凶歳は日本にて豊作の所は十七國なりといふ。

十二日より施粥極々難(澁)の者に被下一人に付三盃づつなり、住吉町は廣濟寺にて被下、石巻は中町門脇は心法寺にて被下。

松木の皮餅を製し貧者に施す

松木の皮餅(此餅は松の木の皮の表皮を去り裏側のアマ皮に蜜等を交へて製る)

中町(石巻市仲町)阿部半□方にて製法相成り極難家へ被下候右は佐藤助□行(ふ?)の由。

御郡奉行菅井三郎太夫殿御代官野村權兵衛殿右人々凶歳に付六ヶ敷人物等相選被仰付候。

本年日本にて十七ヶ國豊年

御城下中にて願の上定芝居向七ヶ年御免、當月十四日(十月?) (十一月二十二日)より於北目町(仙臺市)興行の由。

二十一日此頃の浦谷米相場一切に付五升より六升の由。石巻四升二三盃。門脇(石巻市)稱法寺江戸へ登り候處書狀に江戸は一合に付百文の直段。

石巻白米三升三合古也 大豆一升百六十文位 小豆同二百三十文

十一月朔日(十二月八日)此砌古上米支米にて三升三盃位なり。麥は五升五合位なり。そば一切に付七升位。か(ら)麥(?)一升百七十文位。大豆一升百六十文位。小豆一升二百三十四文位。

十七日頃此砌大豆一升百八九十文位。小豆百五十文位(?) 遠田(郡)は新玄米一切に付五升より六七升位、下米八九升より一斗位。

犬肉を食す

一、新田町(石巻市内)邊にては犬肉を食し候者共有之由相聞候。

一、此頃代相場上り聲(入)口候也。

一、高城村(松島附近)は大困難と相聞口御役人米三俵持參施粥被下候。

十二月餓死者所々多 十五日(一月二十一日)古米四升位、新米六升位、古餅米三升五合位、新五升五合六升位。

餓死者多数
家畜の肉を食す

十二月に至り餓死者多し石巻にても大猫食する者あり馬も食ふ者あり。

牡鹿郡にては先づ眞野村は餓死者甚だあり。

説に日本饑饉と申す内、大飢饉は三ヶ國其内にて仙臺は二番目と云云。

(以上高橋氏曆中の綴込記録)

手跡異なる記録(其二)(高橋曆中の綴込)

春中より雨多。

土用に入り袷に單物着用

六月土用に至り寒し、土用前に一日單物着用、土用に至り袷に單物。

麥も近年に覺無之上作の由取口見る處去年よりも不作なり。

六月八日(七月二十一日)小雨夜大雨。九日雨。十日曇り。十二日少晴天又曇り夜より南風天氣少々蒸なり。十三日

單物、夕より東風。十四日雨夜雨。十五日四ツ時頃より晴又雨夜雨。十六日夜大雨晝後晴晚雨。

此日農夫曰稻は宜し田の水も冷ぬなり世上袷單物、蚊不出蚊帳不用家多。

十七日天氣然し曇多し。十八日曇晝後より天氣。十八日同じく。十九日天氣單物と云ふ程の天氣。二十七日(八月九日) 諸人單物。

早稻出る
初雷雨

七月朔日(八月十二日)小松村四十日早稻出候由外村々未出。二十九日(九月九日)四ツ時過迄雨雷聲あり、當年に成り初ての雷聲、晝より暑なり、朔日小雨夜大雨。二日大東風寒し雨なり夜雨。三日四日頃より天氣南風氣になる、

四日四ツ時頃より天氣。五日六日折々雨なり暑く蒸し。七日天氣、此砌稻大にもて候由。十日十一日東風寒し。十二日より南氣、此砌早稻、中稻、晚稻一同に出候方に成可申と相聞え候。十五日此の日暑是迄無之候暑なり。十六日昨日の通り暑しなり。

各種稻出穂氣構となる

今に稻(稻穂?)も出不申然し出候斗りに相成り今四五日暑に有之候得ば出候由然し安心ならぬ事なり、稻ももて候なれ共長は伸び不申葉斗り大に成り候由。

一昨日迄走り稻に出候處今日に至り一字出揃と云々蛇田町通り(の)田。此夜中は單物にて臥すまでむすなり。

十七日晝までもや(濃霧)なり、むす(蒸)なり、其後晴天夜中大にむす。

十八日(八月二十九日)昨夜半より大南風小雨段々大風に至り晝より大風雨なり、往來相止候程大風、其所により大木までたをれ、夜五ツ時過ぎより段々に相止み蛇田町古家三四軒將基倒し。

稻は今に出不申間(々)無障、早稻は出候間障る。雨は強くは無之、風は諸人近來に無覺風と云。

十九日曇り併しむす夜小雨。二十日東風寒し。二十一日同斷諸人大に心痛。穂も出る斗りに相成居る。二十二日出づる穂は至つて無潤カサカサ也、今日は二十日なり、今より天氣續きたる處は中々ホド遠きことなりと心ある人々は心痛甚なり。此砌村々農人とも作毛甚無心元と相唱ひ、二十三日寒し夜小雨。二十四日雨、風は南氣なり、此日の説に是迄出でたる穂は身のり(稔)可申と云々。此砌の説に大田原(小田原?)上は至つて不宜なり、大田原より此地迄は宜しと云、又福島より此地迄は宜しと云もあり。上方は不作と云、江戸は先頃までは四斗五六升。二十五日昨夜

大暴風雨(颱風?)

全國的凶作

雨今日雨晚晴。二十六日天氣。此日天氣宜き爲に稻出づ、先づ南境村はハヤワセは出でたり花咲き實をなす、日ノ下は不出ナカテ(中稻)所々出づ、先づ世間ともに三ヶ一は出づ、此通りにて八月十日頃(九月十九日)までも天氣つき(天氣續き)時には五分位の作にはなる乎、今に見濟は不定と云。
 二十七日此日ハセ(早稻)の穂を見るに中位にたく實のれり、高屋敷、小才(小齋)(何れも地名)の稻なりといふ。
 玄米一斗五合より九升五合位これ石巻より在へ参り調人調。
 二十八日昨夜飯後より雨、夜まで、今日雨夜まで、昨日小松村へ米買一切に付一斗、二度目に参候處九升に上る。昨日石巻の田丁へ参り見るに三ヶ一稻出る。先づ第一に稻の長ヶ前年よりは半分外なし、農夫の云に善惡ともに此の十日の間なりと云。
 二十九日昨夜より風なをり暖かなり、今日天氣大に温暖なり昨日までは小米屋にて白米一升二百文今日は二百二十文になる。晦日昨夜は蒸なり皆實の(り)宜し大瓜、南境、北境(何れも地名)等は先づ其通りと云、又云ふ半分出ると云もあり、此日十人に九人は單物着用なり。
 八月朔日(九月十日)三十日夜雨、夜半より大雨雷聲あり、今朝大雨風無し、四ツ時頃より大雨止ミ後天氣單物着用。二日早朝より天氣。三日雨晝より晴れ。昨日高屋敷より段々に梅ノ木まで米買に出る者あり、調兼歸る途中にて寒搦き米一升調歸る、此代二百二十五文なり。四日夜中より雨、今日雨、夜五ツ時頃晴。右の雨にて益冷氣なり、在々村々の輩も大體に作毛の見詰相立故に米の直段は八升又は七升に無之候得ば賣不申様に相成る。五日天氣なり、昨夜水霜降り候由、又霜に無之露なりと云もあり。
 六日薄曇り此夜小雨。七日天氣朝夕は格別寒し。八日天氣、稻不殘出揃ふ、然しカサカサアントウ(行燈?)多し、此日高屋敷村夫云三分に至らざる作毛云天保四年は饑饉と云には非ず不作と云もの也當年の作こそ饑饉なり、四年の津輕秋田と同じ。漸く在々作毛の見詰は十に九は相立つ。九日天氣。十日同。既に此砌石巻にて玄米六升位に賣買するもあり、可憐可哀石津(石巻)の下民今日の有様に 上よりの御拂米も去月下旬に二三(夕)とあり其後御拂無之諸人時の御代官を恨む事甚し。諸人の茶話にも去四年飢饉の時の御代官三浦源五右門様の様なる御人なら今や如此境

雷・大雨

九月十四日水霜降る

界あるべからざるもの哉と涙を流すなり。

十二日 上より御拂米渡る一人前一升五合此代一升五十文。石津よりも家内々(家人に内々の意?)他國出の者多し、此砌白米一升三百文位。
 (以上高橋氏記録)

天保八年(紀元二千四百九十七年)

大凶作

暖冬

五月五日、大霜・結氷
餓死者多し

五月下旬より乏雨

暖冬

一月元日(二月五日)上天氣大春の如し。三日晚より陽氣變り寒氣彌益し強くなり雪降り。
 三月(四五日頃新四月七八日)米相場上(り)五升五合六升まで。七日尾張大根時。十日七ツ時より雨降り。
 十一日同ふり(急不)六(聲?)七聲つつなし(く)。十二日種籾つけ。十二日わせ粟時。玄米一切に付五升三盃、大豆一升二百文(以上二十日前後)、一白米一切に付四升、一さくづ(糠)一升五十文、一米粉一盃六十文。
 四月二日(五月六日)朝大霜氷はり。九日夜四ツ半時より□内海屋庄衛火元にて大火。九日十日霜。十一日より上天氣。十五日には單物を相用候事。(四月末)世上一流(帶)種も(不申大騒)の事。
 五月四日(六月五日)五日白米一盃代百文、其節は大橋の下に人一日の朝に十三人ほど死相見得候。
 七月相場 一玄米五升三合 市中相出不申候。
 一白米一切に付四升 一小麥一升九十文 一から麥は五十文
 六月二十一日(七月二十二日)迄頃は植上る。
 七月七日(八月七日)迄田植處々相見得申候。(中旬頃?)稻早生は(ぼぼ)相見得申候。五月下旬より七月まで一圓位の雨不降誠に以(て)近年無覺日輝り(早魁)の事に御座候。
 八月 申の年(文化九年?)より七年斗り米高直に一斗に付百文斗り致候(一斗は一升の誤記か?)
 (以上荒氏記録)
 去冬は冬早魁と申冬(に)なり雪の様なる雪は一度降り、猶寒氣も老人共難堪寒氣と申は二三日もあり。春に成春暖と唱るなり。四月中上方舟より小麥相調候一切に付七升五合。

暖冬

六月初新麥不搗麥にて一〔升〕六十五文より八十五文迄。麥出てより諸人顔色甚相なほり申候なり。
十一月一日（十一月二十八日）に雪少々降り候其後雪のケンキなどは更に無之候事、冬至に相成候てもさのみの寒氣にも無之。二十六日などは大雨仕候事。

一月四日初雪

十二月九日（一月四日）晩初雪降り申候三寸程。

正月古米一切に付四升一杯位新六升一盃位、御拂米古五升新六升五合。

渡波石巻邊にて正月前後犬猫を食し食ふ者生ず

二月に至り米少々上り新一切に付五升五合、一升に付二百六十文もあり六十二文もあり。古四升一杯位。大豆一升百七十文位より二百文迄。渡波石巻にて年内より正月迄は處々に犬猫等食候もの多し、此頃は人肉を食ふ者相聞得候。

餓死者生ず

小糠一升〔四〕十文位より四十五文。

寶曆の飢饉には南部地方にて牛馬を食す

餓死者まれ／＼に北上川へ流れる者多、老人共の茶話にも此度の凶歳は前代未聞なりといふ。人肉を食しと云は天明の凶歳にも不聞なり。寶曆五年の凶歳は御國は次の年は豊作なり南部は二ヶ年續き故に午（馬）牛迄も食したりと云説申傳有之。

説申傳有之。

麥豊作

五月十五日（六月十七日）頃去年米上物四升一杯位、麥四升五合位、大豆此頃下り一升に付二百二十文位。

此頃中町阿部〔與門〕七方にて拂候大豆一切に付七升二合。麥は三十年以來の作なりと云。此節浦谷は米上物六升の由。

二十日裏町上池屋にて麥一切に付五升に調候、四升三杯の處も有之。

米少々上り氣味なり古米先頃迄一切に付四升一杯に候處今二十日に四升に相成り候、新米不宣候處〔品〕裏町問屋にて五升一杯なり。

五月三十日（七月二日）五十集金藏横丁にて新麥の玄米一升八十文に調候大瓜村より調候麥の由。

六月初に至り御城下にて古麥一切に付七升位、新麥玄米一切に三斗の由。石巻にて新麥玄米一升八十文に調候者もあり立町にて三十五文に調候者も相聞得、渡波にて百五十文の由、石巻米問屋にて一斗二升の由。七日（七月九日）八日頃に在々の田植未だ半分植不申候由相聞得候。

八月朔日（八月三十一日）新米裏町へ相出候。八日に新米一升二百四十文、去年米一升百九十文、去々年米裏搗一升三百二十文。三日に新赤□小豆一升二百文、古の大豆一升百六十文、二十二日新玄米一切に付一斗一升に調申候、赤

小豆□□一升百四十文。

九月始に至り新玄米一切に付一斗五升。

十月玄米一斗七升と相成。

十一月に至り一斗六升に相成り、小豆は一升百六十文、大豆は一升八十五文、餅米は一升百十七文、酒は一杯五十文也、糍は一升八十文、元は一杯六十四文。二十五日（十二月二十二日）玄米一斗五升。

貧家の輩等用え味噌拵様 先づ分量の積りは大豆三升〔を〕味噌煮豆に煮て、白米五合常の粥に煮て、鹽一升五合、古味噌二升位も、右取合〔せ〕白にてよく搗きて桶に内〔入〕れならし置くなり。三十日位を経て用宜し。

（以上高橋氏記録）

天保九年 戌年（紀元二千四百九十八年）

五月中〔旬〕頃寒□□□□相應に御座候。

四月十九日（五月十二日）初田植二十日植る。二十七日大豆蒔き。

五月四日（六月二十五日）田植上る。五日頃より不氣候に相成申候、去々ら單物にて居候事不難、日々の事に御座候。

六月（中旬頃か）田畑に鼠大に出る。米一斗三升、小麥二斗四升拂、大麥搗一斗四升。二十七日迄田の草取り。

二日（七月二十二日）より三日大麥打總メ（總收穫量）三十三俵。三日晩より雨。四日同斷。稻は中出（中稻）はひる口に相成候、二筋早わせは三分一通り出き候事、黒毛源六（共に稻の銘柄）は本孕致候。米相場相對にて一斗二升より一斗まで。石巻九升五合より一斗一升まで、代一メ五百四十文。五日不順にて少々雨。六月十二日不天氣。七月朔日（八月十九日）二日上天氣。八日上天氣。九日より雨。米相場一斗より一斗一升迄、大麥搗一斗三升、小麥一斗八升石巻にて。十二日より二十日まで大暑土用中より倍位の天氣なり。二十日（九月八日）少々不催（不氣候）に

野鼠大に出る

大霜

相成候事、稻は總出拂(穂出揃ふ意ならん)、二十七日より雨。米相場一斗代相場一メ六百文。赤初稻せ初田刈(赤早稻初田刈の意か)一束に付二升。彼岸中上天氣に付稻は五分通りこごみ候様に相見得申候。九日新米一斗の賣買赤豆百文位より九十文迄。世上饑饉の唱。

八月四日(九月二十二日)御巡見様浦谷町にて御泊り、片倉十口家御かり上、黒田五左工門殿御宿に相成、岡田右近殿町宿に御座候誠に大唱に御座候。

二十三日(十月十一日)大霜。二十四日から麥二斗の直段にて二切拂候。

九月八日(十月二十五日)大麥時。新米相場一斗より九升まで、大豆一斗五升一切、石巻にて小豆五十文一升に付。二十八日總(毛)出る。代總場一メ六百より。稻刈中天氣能く(刈り申候處、二十八日九日大寒と相成り難義致候事。大豆八千(一俵)上る。

十月二日(十一月十八日)稻刈上る。三日より稻上げに取付。米相場一斗二升、小豆百二十文、大豆八十文但し二郷村相場。十一日大根上る、都合四十五駄斗り出る。十六日稻上げ仕候。十六日晚(十二月二日)雪降る。十五日苗代霜打。二十一日本地田打。二十八日上天氣。二十九日三十日も同斷。

十一月朔日(十二月十七日)大南風暖氣七ツ時より雨。七日晚總疊りにて電。八日九日寒氣。十一日南風天氣よし。十七日暖氣暮半時少々雨。二十一日上天氣南風。十二日退役願出被相戻候。

十二月寒九(寒入後九日目)雨降る。

二郷にて代相場一メ六百文 米一斗三升 もち一斗二升 小豆百三十五文 大豆八十文

十八日南風夜五ツ時より雨暖氣。十九日晴西風。二十九日煤拂上天氣。

閏四月に至り玄米一切に付一斗五合。十九日(五月十二日)より初田植に候へ共石巻近在は十二日頃より植方致候しかし水不足にて遅れ候者共數多御座候。

閏四月は初より雨き(氣)無之十七八日に少々降又二十五日少々降るなり。

一月下旬玄米一斗二升五合。

(以上荒氏記録)

暴風雨

冷氣早來

六月十二日東風氣にて曇り夜中より小雨。十三日(八月二日)朝より大風雨。十四日も大雨大東風なり、石巻にて白米一切に付九升五合なり、玄米は一切に付一斗一升五合。十三四日の寒は九月頃の暮の如し。十五日日少々見得申候然し曇り此夜より大雨。十六日南風至り大雨仕候寒は不甚此夜雨。白米一升百五十八文なり。十七日南風なり。十八日時々雨ふる。十九日晴天。二十日大雨寒し。二十一日晴。二十二日暑氣。二十三日曇る雨。二十四日曇なり。桃生(郡)飯野川にてから麥一升四十文、搗麥一升百文、金うり一斗六升、此相場一貫五百四十文。

六月(初?)裏町にて搗麥一升百二十文なり。二十五日甚曇る寒し。二十六日曇り也、二十七日曉より雨降る此夜大雨東風甚し。二十八日終日降る大東風至り。二十九日終日大雨無風なり。三十日細雨八ツ時頃より晴る。

七月一日(八月二十日)炎天。二日大暑。三日寒し南風なり大に曇る、石巻にて玄米一切に付九升五合、白米一升百八十文、小麥の粉一升九十文、大麥の粉一升七十五文、ふすま一升二十文、餅米一升二百二十文。四日大曇り東風至り、五日朝より雨降晝頃より青天。六日大曇細雨。七日大曇寒し時々雨。八日には西風なり所々にて中でも(八日以下の曆裏面上方欄外に記しあり八月分後半)相成候由聞得也。玄米の粉一升九十文(同上九月の部上方欄外に記しあり)搗麥飯野川にて一切に付一斗三升、から麥一升五十五文(十月)七月九日雨、地玄米一切に付八升三杯、他所米九升五合、地白米(十一月)一升二百三十文右は搗のよろしき處なり、搗の悪しき處は二百十文位なり(曆最終)七月九日白豆一升裏町にて百十文にて無之候。八日に住吉街市の船蔵得丸相下り、船頭御舟肝入武山市太郎方へ罷越候ての咄には六月末に江戸出航の由江戸表も日日の雨甚しき由、至つて不景氣、既に饑饉にも至るべきかと申事所々にて相咄候義承參申候と云々。米相場三斗二升。十日晴天石巻搗麥一升百五十文。四ツ時頃より暑氣に成申候。十一日大曇り四ツ時過雨降りなり。

(以下補足紙の記録)

七月十一日白米一升二百三十七文雨其マ、ハル、玄米一切につき八升也。十二日青天武山屋船越湊へ上より米かへ方に被遣候所十日に寒風澤濱へ着岸仕候米在(有)り一斗二升位に拂方相成申候。昨日飯野川街にて米相場玄米一斗搗麥一斗一升。十三日大暑此夜大雨風にて雨。十四日曉より晴る、大西風となる、當日は二百十日なり五ツ時頃より晴天極暑なり。二十日玄米一斗なり、白米一升二百三十三文。二十六日白米一升百九十五文、新赤小豆一升百十文。二十八

西ノ暴風

日より朝には甚だ冷へ申候。

八月朔日(九月十九日)は朝甚敷冷へ露繁し。二日彼岸なり。三日御巡見石巻へ着仕候。八月不作におし付申候。

拂米相出一軒へ二日に二升、玄一升は百五十二文。市中は古玄米八升一步、新は一斗一步、新小豆一升百二十五文、

新大豆一升百四十五文。

八月十日古白米二百五十文に一升なり。

九月朔日(十月十八日)新白米一升二百文、大豆一升百十文、小豆一升百四十文、新玄米一升百七十文、一切に付九

升三杯位間屋相場なり。

(以上荒氏記録)

(高橋氏記録なし)

天保十年(紀元二千四百九十九年)

一月元日(二月十四日)晝前上々天氣其後西北にて雨。二十二日退役願の通被仰付候事。

二月十二日(三月二十六日)より十四日迄大風、十三日には雪風、代相場一メ五百、米一斗一升五合。十七日雪風。

糸綿一切百分。

二十日(四月三日)種つけ、大風、米二兩三米。二十二日晚より大風。二十八日晝過西の方にて雷一聲。

三月二日(四月十五日)雷數聲。四日種あげ、當地金銀至つて不自由にて、「物」にて通用。米相場一斗代一メ五百

文。十四日種蒔。十七日朝大風。糸綿一切百三十文。

二十六日(五月九日)大雪。

四月七日(五月十九日)迄田打返。大麥さくり二番仕返。日中共單物に居候位暑氣。一、代相場一メ三百六十文に

て錢なし。一、玄米一斗一升。

五月四日(六月十四日)より田植初。十一日田植上る。十二日より大雨。十四日早大麥刈。十四日大暑。十六日、十

七日大豆蒔。十八日田の草「取」。十六十七日雷聲。十五日九ツ時頃地震。二十一日暑氣。二十五日暮六ツ時地震。

地震

五月九日大雪
五月十九日暑氣
通貨拂底す

六月(上旬?)麥七十五駄上げ、米相場一斗二升。二十三日(八月二日)赤早稻出穂。二十五日助總(稻の銘柄)走り穂出る。二十八日雨、米相場一斗三升。二郷一斗二升五合。二十七日二番草仕候。畑も同斷。そば一升七十五文。上酒一杯六十文。

七月十四日(八月二十二日)初田刈、一斗五升より二斗まで。

八月五日(九月十二日)中地震、時雨(時々雨?)。米相場二斗より二斗四升まで相對有之。十九日助總早稻刈初む。

二十六日御目付業下り七ツ時「着」。絹糸一兩に付八十匁位の由、綿糸百十匁に付一切也。

九月八日(十月十四日)稻刈仕候。十四日大麥蒔。十二日御目付業□□。二十五日大麥蒔(大麥蒔二面記しあり)。

十月(初頃)代相場一メ二日五十文。二日七才馬引入る、七切半なり。米相場二斗五升、代相場一メ五百文。八日稻

上仕候。九日不天氣。二十三日(十一月二十八日)七ツ時少々過月三ツ並び出る。糸綿一切百四十匁、米二斗五升、

大豆二郷にて二斗五升。二十五日三ツ並び出る。

十一月(中旬頃)金一切糸綿百五十匁。

十二月二日(一月六日)寒入り南氣、天三ツ並び出る、但四ツ半時頃。二十七日(一月三十一日)九ツ半時大地震。

(以上荒氏記録)

五月二十九日(七月九日)大雷雨降申候。晦日(七月十日)大暑晴天。

六月朔日大雨降申候。二日曇り時々雨降り申候。三日(七月十三日)大洪水、以前鹿又土手の切れ候時より石巻は水

大(多)しと云。三日夜より涌谷大卷土手押切申候。石巻中町、本町、田町中へ水總上ケ也。五日蛇田、新田町、

立町、横町、裏町總水。南部地方は永々の大雨并山供(洪)水等相出候由相聞得候。七日引水と相成申候。五日より

大暑なり。二十日迄引き續き炎暑也、雨少々降申候。二十五日迄大暑。二十六日より曇り大東風至り甚寒し。二十九

日天氣なり。

七月朔日(八月九日)より大洪水なり。二日大雨。三日大雨大東風。四日同斷。五日より大暑なり。七日より引き續

き炎暑なり。

地震

幻月

幻日

幻日
大地震

大雷雨

大洪水

大暑
氣温急降

大洪水

七月洪水にて南部領内山津浪頗出ず

十一月一日初雪

六月の洪水は南部領和賀郡の内村々山つなみの由追々相聞得申候。七月十日より白米一斗づつ賣る、玄米は一斗三升。錢はさし引一貫三百三十文なり。二十八日酒一杯六十文つな

九月二十六日(十一月一日)少々雪の氣あり。十月 實に冬日照、雪近郷の山々に無之時々雨斗り降申候。十一月朔日(十二月六日)雪の氣有之申候。時々雨降り申候。十一月十七日天氣吉(好し)今日より冬至なり、實に冬日照共申者か、是迄雪降不申、時々雨而已降申候(九日二十六日少々雪の氣有之候二十一日)十一月九日大荒降其後は大雨と成申候。(以上高橋氏記録)

天保十一年(紀元二千五百年)

通貨缺乏す

一月元日(二月三日)曉七ツ時頃西大風霰。同日四ツ時頃南辰巳の方雷雲西風。相場二斗四升、石巻一斗九升。錢至つて不足にて諸事不通用の事。十六日影晴御使者被仰付水澤へ下る首尾能相勤二十二日歸宅、午殿三太夫登仙に付糸綿相調申候由一切に付百八十五匁の直段。

幻月。

二月(初頃?)米二斗三升、代一メ三百文にて代無之由。糸綿一切に付百三十匁。(中旬頃?)仙臺表糸綿百二十匁、涌谷町百十匁。二十四日(三月二十七日)曉八ツ時月三ツ并び出る、同日期五ツ時前月二ツならび出づる、辰巳風吹く。四日苗代くろぬり。

四月十五日大雪垂氷下がる

三月十三日(四月十五日)大雪寒氣垂氷下がる。糸綿百十匁、代相場一メ二百文。米二斗四升。二十五日六日種蒔上る。米相場二斗三升、代相對にて九百文より一メ文まで候事。正金銀札にて引替相對にては正金一切へ歩札四切引替相成事。

雷雨

四月九日(五月十日)田打仕候。六日西の方より雷聲にて大雨。(二十二日?)(五月二十三日)地震是まで三度。(下

旬)代一切札にて八百文。相場二斗。

地震 田に毛蟲生じ苗を食す

五月十四日(六月十三日)大豆蒔、中地震。九日田植十二日植仕舞候也。あらく田の毛蟲誠に無覺作人共も是迄無覺

日々雷聲

由、苗喰ふ事おそろしき事に有之候。米相場一斗七升、代一メ五百文に相對八百文。二十七日より一番田の草取。

地震 稲に蟲付く

六月六日(七月四日)一番草仕候也。五日じゆうねん植。日々雷聲。二日蠶引上る、但し百枚にて糸繭七斗、大まゆ一斗五升。十五日(七月十三日)晝時中地震。稻へ蟲以ての外大附、白毛へ大に相附事。二十二日仕返し(田の)。

大雷雨 高温

二十三日畑一番仕返し。二十八日より景晴御目付業へ當番。二十九日大根種蒔。七月一日(七月二十九日)大雷大雨。二日同斷、近年に無之暑氣、朔日より荒(大略)日々。二番草(以下日次不詳)。

一、生絲二百二十匁右は午渡三太夫相頼仙表(仙臺)にて一兩に付六十五匁に拂、御當地にては五十五匁に拂又四十八匁に拂の者も有之、絲綿百匁にて仙表にて調。一、御當地絲綿八十匁。一、米一斗六升にて上へ三俵賣上候事。

大暴風雨

十月稻上仕候也二千五百(匁)、(下旬頃?)相場二斗七升代七百文。二十六日(十一月十九日)夜九ツ時より辰巳風吹き出し大嵐大雨に相成、二十六日降り候分二十七日南川□□内多く、稻流レの者共三千位流レもの有之由の事。十一月(月末頃?)代相場七百文、相場二斗。石巻にて一斗七升。三十日(十二月二十三日)上天氣。

南の暴風 大地震

十二月一日(十二月二十四日)雪風。三日上天氣南風。十六日少し雨。十七日南風。十八日南大風。二十七日(一月十九日)晝四ツ時大地震。(以上荒氏記録)

(七月下旬石巻松本横丁へ參ル小島寅治)ト記シアル高橋氏曆 高橋氏曆本には氣象に關する記事なし。

天保十二年(紀元二千五百一年)

荒、高橋兩氏曆共天候に關する記録なし。

天保十三年(紀元二千五百二年)

天保十二年十一月二十四日(一月五日)寒入。十二月四日(一月十五日)暮半(時刻記載なし)頃より雨。五日明時少々雨もや。

一月元日(二月十日)西風雪はる(晴る)。二日南風晝より西風。三日南風晝後西風。四日雪同風。米相場二斗五升、代五百文。五日上々天気。六日より雨七日迄雨。八日上々天気。九日上天気風、糸綿六十匁、石巻にて米一斗六升、

二十八日(三月九日)朝五ツ時日二ツならぶ、九ツ時またならび候。二十九日雨。

二月十五日(三月二十六日)大雪夜九ツ時過はる。

四月九日(五月十八日)八ツ時過雷聲。十八日(五月二十七日)朝霜。

五月一日(六月九日)西大風。十四日田植。十六日植仕候也。十七日晝四ツ半時地震中より大。

六月十五日(七月二十二日)曉八ツ時より西大風明方より風ぐ。

十一月十四日(十二月十五日)至つて暖冬に有之。二十一日春の如く。二十二日曉七ツ時より雨、朝五ツ時晴、四ツ時まで南風夫より西風上天氣。二十四日まで春の如く。二十四日風雪。二十九日少々雨降りもや。

十二月六日(一月六日)寒入より嚴寒にて氷口能事。十三日八ツ半時雨、夜に入り大雨、口頃より晴。十四日朝もや上天氣にて春の如し。二十七日雨もや。

(以上荒氏記録)

(四月二十二日中町(石巻市仲町)高城屋忠吉屋敷より門脇(石巻市門脇)千葉屋千蔵屋敷(轉宅致候也)と記しあり小島寅治氏か)

飢饉年表

- 寛永十九年 天 下 飢 饉 天保七丙申より二百七先(百九十四先)
- 延寶三卯年 大 飢 饉 三十一先(三十四先) 丙申より百二十六先(百六十一先)
- 天和四年 大 飢 饉 九先(十年目) 丙申より百三十五先(百五十二先)
- 享寶四年 西國浮塵子付大飢饉 三十二先(三十六先) 丙申より七十三先(百十七先)
- 天明四年 關東奥州大飢饉 六十二先(六十六先) 丙申より(五十二年先)
- 天明七年 諸國大飢饉 三年目 丙申より(四十九先)

- 天保四巳年 小 飢 饉 六十二年目 丙申より(三年先)
- 天保七卯年 大 飢 饉 也 (四年目) (以上高橋氏曆)

天保十四卯年 (紀元二千五百三年)

一月元日(一月三十日)上天氣七ツ半時より小雨。二日天氣よし。三日少々雪降り。五日□□□□(雨夜に入)雪。六日曇時晴。五日(二月三日)晩さるの方西山かけ(陰)より南の方へ白くたな引誠に不思議なる事に候、幅一尺餘、十四五日頃の夜より少し赤めに成(廿九日夜薄く相成)晩日の夜見へず。

二月初日(三月二日)薄く相見え三日より見へず。

三月二日(四月一日)雨。三日晴西風。

四月二十八日(五月二十七日)九ツ時地震。(中旬頃? 天然痘流行し記録者の家族四名罹病す)。

五月十日(六月七日)七ツ時過地震。十一日雨。

六月三日(六月三十日)暮五ツ時中地震。十一日八ツ時地震。十三日麥刈五人にて。

九月(始頃?)大洪水にて田尻、中津邊にて稻流(れ)松山分、岩手山分にて同(じく)流す。利府邊、高城邊同流す。右に不寄所々にて流す。角田、互理にて大洪水にて同流す。

閏九月六日(十月二十八日)雨雪。九日大雪降る。十三日同降る。

十一月二日(十二月二十二日)上天氣春の如し。五月少々雪降り。冬至中上天氣春の如し。氷(凍)もの杯は相成不申候事。十八日より少々寒し。同日雪降り。

十二月三日(一月二十二日)中暖氣春の如し。四日雪降り。八日雪降り晝より晴風。十日より降り續き。十二日風雪。

(以上荒氏記録)

二月三日より三月二日まで極光(?)現はる

地震 天然痘流行

地震

地震 宮城縣全部大洪水

大雪 十月一日

暖冬

北上川洪水

閏九月三日(十月二十五日)北上川大洪水なり。

六四
(以上高橋氏記録)

暦本改革の辭

天保十五年甲辰
弘化元年辰
(紀元二千五百四年)(天保壬寅元曆)

江戸曆開版所 大坂屋長四郎

今まで頒ち行はれし寛政曆は違へる事のあるをもて更に改曆の命あり遂に天保十三年新曆成に及び詔して名を天保壬寅曆と賜る。

抑も元文五年庚申寶曆五年乙亥の曆にことわる如く一晝夜を云は今晚九時を始とし今夜九時を終とす然れども是まで頒ち行はれし曆には毎月節氣中氣土用日月食の時刻をいふもの皆盡く夜を平等して記すが故其時刻の鐘とまま遲速の違あり今改る所は四時日夜の長短に隨ひ其時を量り記し世俗に違ふ事なからしむ今より後此例に従ふ。

出水

一月以降十一月まで記事なし。
十二月二十七日(二月四日)昨夜より大風雨八ツ時頃より石巻川口大洪水。

(以上高橋氏曆)

連日暴風雪

弘化二年
(紀元二千五百五年)

一月 十二月晦日晝頃より大風。二日(二月八日)朝の内より雪風。三日雪風。四日少々雪風。五日吹ゆき。八日九日雪風。二十一日より大雨。二十二日より大風。
五月九日(六月十三日)大川メ切(關門メ切)。十一日大雨。
七月九日(八月十一日)より大雨。
八月□□□□大雨。十八日(九月十九日)大風。
十月五日(十一月四日)大雪。二十四日(?)大雨。
十一月十八日金右衛門景晴(記録者)御目附被仰付候事。

(以上荒氏記録)

暴風雨

大雪

二月一日(三月八日)より三日朝まで引き続き降雪四尺餘なり。
五月二十一日(六月二十五日)より曇。二十三日より東風。二十九日大暑。晦日東風曇。
六月四日(七月八日)雨少々降。五日曇。以下記事なし。

(以上高橋氏記録)

弘化三年
(紀元二千五百六年)

(記録者 荒左七郎)

大雪、暴風

一月二十四日(二月十九日)大雪。三十日大雨。

二月朔日(二月二十六日)暮五ツ時より二日七ツ時より七日曉まで大風。八日雪降り。十七日より大雪ふり。

三月二十三日(四月十八日)上谷地にて砲術鈴木久八郎百文を以て傳交相開き候事。

四月(八日新五月三日頃?)大南風□□□暑氣北風。二十(三)日不天氣。

五月二日(五月二十六日)五ツ時より雨降り九ツ時明申候。

閏五月二十九日(七月二十二日)大雷。

十一月二十三日(一月九日)夜四ツ時より八ツ時まで大風。同二十四日上天氣。

(以上荒氏記録)

高橋氏曆本に氣象記事なし。

弘化四年
未丁年 (紀元二千五百七年)

一月元日(二月十五日)上天氣少し曇。二十三日夜雪ふり。二十四日大風。
二月四日(三月二十日)暮五ツ時地震、同八ツ時地震。十八日雪降り。
三月九日(四月二十三日)十日十一日風。二十八日上天氣少し風。三十日曇なでる。
四月八日(五月二十二日)晩方よりたつみ風にて甚大風。九日西風(に)直り大風所々に破損あり。十日雨ふり。十三日夜大風。十四日上天氣少し風。二十三日上天氣。二十四日上天氣。二十五日雨降り。

六五

地震

五月一日(六月十三日)雨。二日曇。三日雨。四日晴雷。五日上天氣。七日雨降り。八日雨降り少し風。蠶先口十五日引初、後蠶十七日引上る。二十四日雨降り。

六月四日(七月十五日)四ツ半時中地震、雨ふり、四日より□る相出五日盛りに相成候。八日曇風□(日)雨ふり。九月九日(十月十七日)上天氣。

十一月二十一日(十二月二十八日)晚九ツ時より雨。二十二日朝もや。

十二月朔日(一月六日)上天氣。二十五日大雨風雷氣不堪水雨降り申候晝時より大雪。

(以上荒氏記録)

暴風雨

高橋氏曆本には氣象に關する記事なし。

弘化五年 嘉永元年 申 戊 年 (紀元二千五百八年)

一月元日(二月五日)上天氣。二十日少々曇風。二十三日大風。二十四日雪降り風。

二月六日(三月十一日)風。七日風。十九日雨降り。

三月十日(四月十四日)雨降り。二十一日上天氣。

四月三日(五月六日)半曇。

五月五日(六月六日)大雨降り。十三日不天氣風。

七月十二日(八月十一日)大暑少し風。

(以上荒氏記録)

酷暑死者多し

此年江戸表三十年來の甚暑故諸人暑氣に中(あたる)處々目(見)付五六百人位づつ死人通候。

其中淺草目付は別(し)て多分第一澤山通(る)日は百二十人通候當國外諸國も十五日□□□覺者共□多。

大暑(六月二十三日新七月二十四日)〔頃無〕種稻候在(之)種稻〔種稻之ある〕處も水不足の處不宜右故(に)七分の作也

年々深田にて困候處大作の由也。

(以上高橋氏記録)

早敷年

深田上作

嘉永二年 酉 年 (紀元二千五百九年)

日蝕

二月朔日(二月二十三日)上天氣に日食有之候事。二日大雪降り。

三月四日(三月二十六日)雨天。九日少し雨天。

五月二十二日(七月十日)雨降り候。二十四日少々雨。二十五日同。二十六日同少雷。二十七日雨。二十八日同。三十日雨。

十一月十四日(十二月二十七日)晝時より大雪暮頃晴。

(以上荒氏記録)

高橋氏曆本には氣象に關する記事なし。

嘉永三年 戌 年 (紀元二千五百十年)

二月十一日(三月二十四日)大雪降り。

六月六日(七月十四日)九ツ時より少々雷氣雨、同日七ツ半時大雷大雨、遂に中御門大櫓杉へ雷落仕梢より二三間下より折れ候事。

七月十四日(八月二十一日)十五日十六日雨。十七日雨。

十月十三日(十一月十六日)初雪風。

(以上荒氏記録)

十二月四日(一月五日)雪。

高橋氏曆本には氣象に關する記事なし。

(以上荒氏記録)

嘉永四年 亥 年 (紀元二千五百十一年)

十月二十六日(十一月十九日)始て雪降る。二十七日雨降り。

(以上荒氏記録)

高橋氏曆本には氣象に關する記事なし。

嘉永五年 子 年 (紀元二千五百十二年)

初雪

大雷雨落雷

初雪

大雪

二月二十二日(三月十二日)明時より暮時まで大雪無風にして樹々花の如し。
閏二月二日(三月二十二日)雪降り。九日大風。十八日十九日二十日雨。
三月十一日(四月二十九日)晝より雨。十二日十三日雨。二十八日晝前晴。三十日晴。
四月四日(五月二十二日)雨。

大雷

六月初日(七月十七日)大雷、風八ツ時より七ツ時頃まで。二日晴。
七月二十二日(九月五日)大風雨。二十三日晴大風。
九月十一日(十月二十三日)晴風。二十五日雨降り。
高橋氏曆本には氣象に關する記事なし。

(以上荒氏記録)

大旱

四月十六日(五月二十三日)より雨不降。

嘉永六 丑癸年 (紀元二千五百十三年)

蠶豊作
蚊、蚤、蠅少し

五月(上旬末頃?)所々に雨乞有之候へ共一圓に降らず。蠶大當にて三百六七十枚にて引き上る糸繭二石五升外に大繭五斗。當年蚊蚤至つて不足、蚤も同斷、蠅も至つて不足。糸値段百六十匁に相拂候事。

大野火

六月 當年の日照は二百年以前に有之候由の事大日照。右に付二郷谷地十日頃(七月十五日)より青谷地焼出し大谷地一字焼け、其上木間塚谷地、大柳、赤井谷地迄七月十二日迄焼候。二十日晝八ツ半時雷雨少し降。

六月七日江戸近所相州浦賀へ異國船渡來致候事。

八十四日間の大旱
蠶

七月十一日(八月十五日)迄大暑照續東風大風にて。十二日五ツ半時頃より大風雨に有之候、十二日迄一圓に雨降らず同日八ツ半時晴。十六日(八月二十日)晚彗星相出但し北西の方。二十三日晴。二十七日迄一圓に雨降らず。

彗星

八月十三日(九月十五日)たつみ風にて雨降る。二十日朝より風雨。

九月五日(十月七日)風雨。八日雨。

初雪

十月二十四日(十一月二十四日)七ツ時頃より陰々として初雪降る也。

十一月七日(十二月七日)朝より上天氣。

十二月七日(一月五日)夜九ツ時頃雨翌日まで。二十日夜七ツ時頃より大雨、翌二十一日晝七ツ半時より風雨。

(以上荒氏記録)

高橋氏曆本には氣象に關する記事なし。

嘉永七 甲寅年 (紀元二千五百十四年)
安政元 寅

一月三日(一月三十一日)雨。四日夜雨。五日朝晴。十五日大雪降り。

十五日浦賀へ異國船十九艘乗入候由に付大騒に御座候仙臺よりも百人近(く)江戸に登候事。

二十一日雪。二十二日晴。二十三日風。

二月二日(二月二十八日)風。二十五日晝九ツ時門脇へ異國船一艘渡來の旨同所御用達より申來り候事但し船立縦三間半横一間二尺余人數十六人參り石巻大騒動の由相聞へ候事。(二月二十五日は四月二十五日?)

六月十六日(七月十日)より十八日迄大風。二十日迄大暑。二十五日格別冷氣にて雨降。

七月三日(七月二十七日)七ツ半時大地震所々破損。

八月三日(九月二十四日)晝八ツ時地震少々長びき申、仙臺などは去月三日より強く有之。二十六日天氣よろし。

十一月四日(十二月二十三日)朝より大雪風寒き様。六日少々降る。九日夜通大風。十日晴天風なし。

(以上荒氏記録)

今年四月二十五日(五月二十一日)晝九ツ時頃アメリカ、ワシントの由十五人乗りバッテリー石巻入津、二十六日朝五ツ時頃出航相成候予川口詰合御小人才藤徳之進ト一同御用船にて川口迄見送。

十月二日(十一月二十一日)夜四ツ時より三日朝五ツ時迄東都大地震。

備と申すは平年用(え)がたき位の品にて宜き物也或しな米蒸し又サハテ米右同斷何ニ米にても蒸しサット搗方備ひ可申のこと上白米は如何とも及兼ねるもの也平年食し兼ねる位の品は何れにも出る故心懸べきことぞかし。
(以上高橋氏記録)

東都(東京)大地
震
備荒心得

氣温急變

大地震

大地震

安政三年 (紀元二千五百十六年)

二月十七日 (三月二十三日) 吹雪。十八日雪。二十三日二十四日終日雪。二十五日少々雪。二十六日前夜より當日大雪。

濃霧

月紅なること甚し、風霾か

三月二日 (四月六日) 雨。二十八日大霞。

四月十三日 (五月十六日) 雨。十九夜 (五月二十二日) 月紅なること甚し。二十一日雨。

六月二十一日 (七月二十二日) 晴。二十三日今日より大暑。二十四日より七月朔日まで日々晴。

七月二日 (八月二日) 大暑 (暑氣甚だしき意)。六日電。七日同。八日雨。九日雨。十九日五ツ半時地震有之同刻少し過震返し有之、二十二日殘暑甚しく恰も土用の如し。二十三日地震有之、同ゆり返し、同、同餘程の地震、同小地震、同、同、二十四日七八度ゆり申候事。

地震、續震、頻發殘暑

八月朔日 (八月三十日) より雨降り。二日同斷。十日朝より雨降り。二十五日夜大雨風。二十六日洪水大橋元さいか

洪水

ちの根廻 (かへり) 申候。

小鐘は三十年に一度、大鐘は五十年に屹度あると云事疑なきこと也必心かけ申べく候也。

飢饉心得

この外氣象に關する記事なし。

(以上高橋氏記録)

安政四年 (紀元二千五百十七年)

五月二十八日大霜
鳴子? 降雪

五月朔日 (五月二十三日) 大雨。二日晴。四日より雨丑寅の風にて大に寒し。六日朝大霜。五日湯元 (鳴子温泉?) 邊雪降る。

閏五月十四日 (七月六日) 雨曇。

七月八日 (八月二十六日) 陰々として大雨あり。

(以上荒氏記録)

大雨
饑饉心得

凶歳の備と見語相立米の安き年四斗也五斗也臨時及ぶ程を蒸し搗方仕貯ひ可申事、手に叶ふ時一ヶ年にも可然、去り

とて平年人に貸し候ては宜しからず。

凶歳は勿論大不作の年は春より何にとなく知れる者也、第一春より不氣候、諸物不成就木の目等後れ (晩れ) 或 (は) 蠶等不宜何れ用心可致者也。八九月に相成不作と押付き候はば米は如何様にや配り、去年米調申度事也。其の年の米は宜しからざること甚し。尤も遂に右様の年は米引上る者也。何分心ばやく調申べき事。

(以上高橋氏記録)

この外氣象に關する記事なし。

安政五年 (紀元二千五百十八年)

江戸コレラ大流行

二月十七日 (三月三十一日) 夜春晴也。二十九日雷聲雨も少々降る。

六月十四日 (七月二十四日) 迄霖雨 (是迄降雨の記事なし)。十五日大雷雨。十六日少々雷雨。十七日十八日雷雨。十九日晴。

七月二十日 (八月二十八日) 晴天。

八月二日 (九月七日) 菱喰 (雁の一種) 來り霜湖へ下る。

八月中江戸表にて流行病氣にて十萬人余死申候由に相唱へ申候説には玉川上水へ病毒相流し候由に候事。

二十四日 (九月三十日) 夜初 (めて?) 彗星出るを見る長三間に見へ、南北と星相出、北の星はほをき星。三十日夜より南方の星ほをき星に相成候誠に妙なり。

九月二十三日 (十月二十九日) 二十四日晴。

八月 (下旬頃?) 彗星三ヶ延出。

六月中イギリス、アメリカ、フランス右三ヶ國の大船六艘來る、七月下旬何れも出帆相成候。

此年八月二日 (九月八日) より東都になへてころりと申病甚以 (て) 大流行、諸人殊頓死の由十二萬人余の死亡也と云々即痢病なり。

萬病回春の霍亂門にある濕霍亂也虎狼病と云。

(以上高橋氏記録)

江戸にコレラ大流行死人多し

彗星

ひしくい來る

江戸流行病にて死人多し

彗星

江戸にコレラ大流行死人多し

飢饉心得

大雨

大雷雨

江戸コレラ大流行

安政六紀年 (紀元二千五百十九年)

地震
六月二十三日綿入着用
連日雷雨
暴風雨、風災多し
暴風雨、風災多し
近年稀有の大暴風雨
石巻にてコレラ大流行

三月二十六日(四月二十八日)夜八ツ半時雷聲二度あり。二十九日夜地震。三十日晚地震。
五月十三日(六月十三日)〔本〕日迄二十日已上(以上)干魃堀水一切流なし。十六日大川メ切。十九日より二十二日まで雨。二十三日(六月二十三日)寒く綿入着用。
六月十二日(七月十一日)十三日十四日雷聲雨。十五日十六日雷聲大雨。
七月二十五日(八月二十三日)辰巳風にて大風雨夜に至り稱まし嚴敷處々被損甚しき事也。翌二十六日半晴風も穩に相成候。
八月十三日(九月九日)四ツ時より八ツ時まで大風雨處々破損夥し。
九月一日(九月二十六日)雨降り。
七月二十六日(八月二十四日)の大時化は近年まれなる大時化なりと云。
八月虎疫大流行而石巻にて人多く死するなり。
十月屋形様エソ地此度頂戴被仰候也。屋形様、保科様、酒井様、佐竹様、津輕様、盛岡様右六家にて頂也。

(以上荒氏記録)

(以上高橋氏記録)

安政七庚年 (紀元二千五百二十年)

大雪
二月二十日(三月十二日)大雪二尺余降る。二十五日斑雪降る。
三月三日(三月二十四日)細雪降る。
七月十日(八月二十六日)雨氣。十一日十二日雨風。十三日風。
十月二日(十一月十四日)朝少し雪降り。二十八日風雨、七ツ時晴る。
十一月八日(十二月十九日)晝九ツ時より斑雪、翌十日雪ふる。

地震

十二月朔日(一月十一日)夜地震あり。十八日曉七ツ時より雪降り已に盈尺(一尺に達すの意か)。二十日終日雨降。(以上荒氏記録)

三月三日伊井掃部頭様西丸へ御登城の砌水戸家の藩中十七人にて櫻田御門の外にて彦根候を打取る也。

閏三月朔日年號改元之御觸成る萬延元年と成る。

飢饉の備ひには米穀及ばざる時は味噌鹽也、味噌鹽は米穀よりは代不足に〔て〕も及ぶもの也。尤もラキ(置)所にも不迷もの也「備ひにはひじき大(第)一也是は古き程よろし蟲食と鼠食との患イ無」。(以上高橋氏記録)

萬延二辛年 (紀元二千五百二十一年)

鶴群來す
彗星
彗星
大地震被害多し
十二月一日大洪水
初雪

三月九日(四月十八日)鶴百羽余飛び違ふ、翌十一日同。
五月二十五日(七月二日)夜初て彗星見えたり。
八月十日(九月十四日)霜沼にて菱喰十羽斗り飛過を見る。
九月十八日(十月二十一日)曉口時頃大地震處々人家相つぶれ破損夥敷候事。
十一月二日(十二月三日)夜まで三日三夜雨降洪水、馬場通(涌谷町)如海、北小牛田ニケ所押切他郡も無類の水。
七日夜初雪積林如花鮮。
十二月十八日(一月十七日)堀川氷落(解氷)如小春暖氣。十九日曉八ツ時頃より雨終日降る。二十九日大風。
(以上荒氏記録)

二年年號改元なるなり、文久元年となる也。

九月十七日(十月二十日)(荒氏曆には十八日とあり)大地震人家つぶる。處により人死も有之。

十一月一日(十二月二日)大水、下通土手切る。

十月二十八日(十一月三十日)より二十九日、十一月一日、二日、三日と大南風大雨にて北上川大洪水、享和二年以來の大洪水なりと云、上河通所々北上川水除土手押切等是在(有之)。白米改正手形一切に付四升一盃のところ三升

大地震死者生ず
大洪水

備荒心得

鶴群來す

彗星

彗星

大地震被害多し

十二月一日大洪水

初雪

五合となり候事。

今十一月十四日に至り雪今に降不申候事。

十二月五日(一月四日)天氣。六日同晴天。七日雪少々降。八日天氣。九日同。十日同。十二日同。十三日同。十四日同大西風。十五日大北風。十六日大西風。十七日大西風最上(米澤地方)境外は雪一向に見得不申候。

(以上高橋氏記録)

文久二 戊壬 年 (紀元二千五百二十二年)

荒氏曆本欠。

高橋氏曆本に氣象記事なし。

文久三 亥癸 年 (紀元二千五百二十三年)

一月元日(二月十八日)曇天氣。二日少々雪風。二十三日雨降。

二月八日(三月二十六日)晝頃より雨。十四日大風。

三月十五日(五月二日)より日月出入紅の如し。

五月二十四日(七月九日)二十五日櫻丁、大川メ切。

五月五日(六月二十日)曇。十一日小雨有。十三日雨降に付翌日より田植始る但早魁に付植殘へ(植殘りの田への意)

十四日雨降。十七日半晴。十八日午前(自分)田植なり。二十日午前田植仕(田植終了の意)候也。二十六日雨降り

田植あり。燕子出羽(發葉)候事。二十九日曇。

六月 上谷地へ大根蒔。十八日(八月二日)六軒丁浦(裏畑)に大根蒔。二十日同所へ大根蒔。

七月四日(八月十七日)晴。

(以上荒氏記録)

高橋氏曆本に氣象に關する記事なし。

暴風

風霞?

三月末元治と改ま

暴風

雷雨

萬花満開

暴風雨

カキツバタ水枯

早冷

海鳴

地震

早冷

地震

雷聲甚し

雷雨、暴風

不作

洪水

文久四 甲 年 (紀元二千五百二十四年)

元治元 子 年

一月元日(二月八日)晴天大風。

三月五日(四月十日)曉より雪降り明時三寸余積る其後雨雪降交終日降る。二十八日辰巳の方雷聲あり。二十九日雷雨あり。居懸屋敷中萬花満開。

四月十八日(五月二十三日)晝九ツ時より暴風雨。二十九日朝より雨。

五月 昨年より燕子水枯當年も同斷。三十日(七月三日)頃最早出ぬ様に相見え候。

土用入後格別冷氣に相成申。

七月十六日(八月十七日)より東名濱邊(石巻附近の一字)浪聲如雷、十七日同斷。十八日同斷。同日地震あり。二十三日冷氣。蟬聲四方に甚し。

八月三日(九月三日)雷雨。八日雨。九日大風。十日晴地震あり。十一日半晴。十二日晴。十三日晴。十五日夜四ツ

時頃より鴻七羽初めて飛ぶ(ぶ)聲を聞(き)猶見(る)かたちを。

十月二十二日(十一月二十一日)夜雪降る。

十二月五日(一月二日)雨天。十七日寒風。

(以上荒氏記録)

高橋氏曆本に氣象に關する記事なし。

元治二 乙 年 (紀元二千五百二十五年)

慶應元 丑 年

二月二日(二月二十七日)夜三朝雪降已盈尺一入の雪景に相見え候。同日五ツ時晴風吹。米一石に付代六メ二百

文。三月二十二日(四月十七日)仙臺府洪水。二十六日大風。

四月四日(四月二十八日)雨降り。

當年桑高直雜桑一升百三十目位にて四百文余、段々下直同一升百六十文より百五十文位にて相調候事。伊手(伊達?)桑一俵目方九メ目位にて此代ニメ文より三メ文余迄致候事。世上稀なる高直なり。取桑にて代四メ以上致候事。閏五月六日(六月二十八日)田植。七日頃より雨天曇り。十八日早せ茄子切る。二十四日菱相出候事。土用前より曇。二十六日一番田草。

六月初日(七月二十三日)より天氣快晴。二日上天氣。三日曇り。七日大根時。八日雨天。十六日より風雨。七月十六日(九月五日)雨天。二十八日改玄米一石八メ三百文位、白米一石十メ五百文、もち玄米一石八メ五百文、同白米一石十一メ文。

十一月十七日初雪

九月二十六日(十一月十四日)上天氣。二十九日初雪降る。

十月 玄米一石代十メ文余。三十日(十二月 七日)少々雪降る。

十一月十三日(十二月三十日)改浦谷直段油一升代八百六十文、玄米一升代百二十文、小豆一升代百二十文、もちうる同様玄米一升代百二十三文。

十二月十四日(一月三十日)より米相場一斗四升。

(以上荒氏記録)

此年の十月仙臺の土百姓方にて金石持居(り)百石の輩米五石六石位とほか(より)調可申様無之由相聞え申候事。二郷村にては石六切二米より七切二米迄、大豆一升に付百文、何れも十月直なり。石津は二兩也大豆石九貫文大方なり。十月下旬には二兩二分迄一メ六百文相場。

土用中冷温
残暑酷しく作物見直す

この年春中より冷氣候にて米は遠田郡にては一石六メより六メ五六(百文位)也右三四月下旬五月上旬迄の事なり。後五月に相成段々米高直となり七月には七百文然るに逐日□□□土用前甚暑之處土用に入り至て冷氣單物相用へ候日は土用(中)二三日々雨(天)米□□□□□□拾メ五六□となる然れとも冷氣のみに候□之入□之位と(なり)と見え格別にさもき不申土用明キと相成候日に暑殘暑近年に無之大暑何れ殘暑の爲めに思の外の作毛と成候と諸人唱ひ左(程)不安の事と最初心エ居候、右米直段は逐々下け不申、十月に相成り古米十メ八九百位ひ新十メ四五百。然に諸品高直金の値ひ下り候故にや更に□不申米綿金一切に百十二文目也、鹽は一升百二十文、手巾は一本二百五十文、諸

職人日傭一日三百二十文伯(宿)屋商(人は)三百文、外通行の輩は四百五十文。上方筋は六百文(より)八百文の唱(之由)然れとも金錢の通用宜故神社參詣の輩近年多く諸人心遊多き風に相見申候。慶長金一切は當分白金一兩に三百位迄引替の由、ド銀は四百文見語唱、文錢は六文、銅錢は四文に通用す。當と(當藩即浦谷藩の意?)仙臺領は錢多く、他國は錢不足の由。江戸は兩に米三斗二升の由。
十月十九日(十二月六日)玄米一石十メ五百文に調。
十一月九日(十二月二十六日)玄米石にて十二メに調。
極月八日(一月二十四日)石にて十二メ六百に調。
(以上高橋氏記録)

慶應二丙年(紀元二千五百二十六年)

小饑饉

一月元日(一月十五日)二日上天氣。十四日盈尺に雪降る、是より天氣相暮諸川水□申候事。同十九日雨降終日此日畑暖に相成申候事。

二月二日(三月十八日)雨天。三日より五日曉迄大風、同日晝頃やむ。

四月十四日(五月二十八日)雨天。

五月初日(六月十三日)田植仕り。二日じゆんさい一杯代二十八文に相調。八時半時より雨三日まで。十一日馬場谷通田植始り。十五日雨天終日。二十一日田植。九日より冷氣二十日より少々暖氣。

冷温

六月 米相場一斗にて市中一圓無之候事。白米一升に付二百三十文。

七日(七月十八日)天氣快晴致候。八日冷氣不天氣一統凶作の唱。九日曇り。十日暑氣曇り。十一日曇り。米相場玄米八升。十一日晝四ツ時快晴致候。同日夏蠶種最中にひる(蠶蛆?)出る。春蠶種(中にも)一つ(蠶蛆?)出候事。同日當夏已來の極暑に候事。十二日暑氣。十七日半晴八ツ時中地震、同夜冷氣相催候事。

七月初日(八月十日)大蟬の聲初聞。南郷にて玄米一石代二十二メ文餘に候事。伊達郡、村百姓一騒起る三千餘人蜂起同所代官山ノ内源七郎殿桑折御陣屋にて迷惑相致候由唱候事同村中金持豪家の者共居家は不申及土藏等打破候由の

地震
大蟬啼き初む
福島縣桑折附近に
百姓一騒起る

洪^レ三迫に一撥起る
暴風雨
八月十一日水霜降
鴻来る月蝕
鯉大漁

大霜

十一月二十一日降
雪、地震

異常高温

異常高温

凶歳準備

飢饉週期

事。同月二日大風雨洪水。五日栗原郡三迫の百姓共一撥相催四千程出村の由。三十日大蟬聲聞く。

八月一日(九月九日)雨。七日夜より□□大風雨。八日草木打倒れ申候。十一日曉水霜、同夜鴻来る。十六日月蝕。

當月生鮮大漁に有之代飾位なり。十七日雨天。十八日雨天。當所搗麥一升二百十文。南部の者参り候に付模様承り候

處玄米一升代五百文、搗粟ひへ一升到付三百文に候由。二十七日雨天。

九月 上旬寒搗白米一升代三百三十文相對。石卷にて玄米一石に付金五兩二步致候。二十二日(十月三十日)夜大霜

降。二十三日晴天。石卷にて米一石金六兩と相成候事。

十月 石卷にて白米一石に付金十兩位致候由。十五日(十一月二十一日)雪降る寒氣甚だし。十七日夜地震ゆる。十

九日雨天稍雪降り寒。新玄米金一切に付六升町相場なり。二十八日大ぶりの雪降る。

十一月二十六日(一月一日)晝頃迄無類の暖冬なり。二十七日相寒し申候事。

十二月十日(一月十五日)暮時より烟霞陰々として暖氣、深夜尙ほ甚しき事三四月の模様。(以上荒氏記録)

正(月)始(上旬)終(下旬)米百二十七文二郷。石卷は百五十文。

二(月)中旬百二十八文迄に成同所。石卷は百六十文。

三(月)中旬下旬百三十五文同所。石卷は百六十文。綿は去年より二匁下で四百文に付三十匁。

三月涌谷より作子仕候輩百刈に付人足二人づつ地頭働き助勢の旨申來る非類の過沒なり。(人頭割申付けられたるに

對する不平ならん)

此年(は)小飢饉と申すものなり、二郷にて米極高のときは二十四切也一石にて。

此年思の外大不作なり、然るに春より不氣候。總て凶年は勿論大不作、春より何にても不成就の方に候、心を用ひ可

申事。

天保巳ノ年より今年三十四ヶ年目也、末より三十二ヶ年目(三十一ヶ年目)也、然(に)天保申年大飢饉人死也。是末

の實のり無故也。古人云ふ飢饉三十ヶ年大飢饉五六ヶ年中に來ると申事必定也心カケ要用也。

四月二十六日(六月九日)米一升百四十文に成る、二郷にて。石卷百七十五文。

陰冷

五月二十二日時鳥啼き初む

土用末より高温となる

殘暑酷

冷氣再來

五月二十八日(七月十日)二郷にて米の玄米一升百七十文迄買方仕候者相見由。石卷は二百十五文位と見ゆ。

五月になり日々雨天冷氣なり。五月二十七日(七月九日)より天氣。二十八日にはいやまし宜し。

四月八日(五月二十二日)初めて時鳥を聞く。

蠶四月一日三日と二度掃き立仕候之處不天氣冷氣故長引き、五月二十二日(七月四日)夜起桑付、後口は同月二十四

日桑付、先口は二十八日三疋引。

五月に成り米追々引上げ、六月初より中旬には石二十二匁五百文と成。七月初に成り少々下げ二十二匁位の由。

五月より引き續き雨天、土用に到(り)同然然し蒸し候得共雨、大に世上心支仕候、然に土用末はよい暑氣となり日々

天氣、諸(人)心引直し申候。七月七日(八月十六日)頃より早稻中稻は早植の處出(穗)候事。十日には餘程出懸り

候(想テ諸心)後れ候へ共引直しよろしくは見え候事。十日は土用明き、十四五日に成り候(て)近年稀なる殘暑に候。

七月十九日(八月二十八日)頃より朝夕は冷氣に相成る、稻は半高出に相成不申。

米は少しく引下(ケ)□□百九十文位、食鹽は引上げ一升到付百六十文蜜にて。夏まゆは種と玉共一升八合に調候由但

金一分に付。絲とりまゆは二升位の様子に聞え候へ共髓の事は未詳七月二十七日也、然に二升五合は髓の由。絲三十

八九文目に拂。

八月十五日(九月二十三日)朝より曇り晝後は少雨晩方より大雨となる。酒興の上に、

待ちワびし心元もあらじ中稻オチの中夜の月の見えぬこそ憂し

よもすがら詠むる空の晴やらで降り行く今日の月をしぞ思ふ

想て不天氣續きの年は手に叶ひ候はば食鹽は買置申度ものなり、今年も遂に食鹽は引上申候其上賣人無之調兼候様の仕合に候。

九月承る南部は凶歳にて□□候由米一升は八百文の由。

八月十四五日(九月二十三日)頃は玄米石にて二十一匁直に引上。九月十四五日(十月二十三日)二十八匁相

場にて三十匁にて米無之事。

陸中凶作

暴風雨

八月八日(九月十六日)大時化なり、土用中米引上二十三メ□□引下十八九メに候處時化後二十三メ。
九月一日(十月九日)頃には二十五メにて米引つる(引上り氣味の意)也。
此年中秋無月雨なり。

八〇

九月一日晴天なり。曉は甚冷る也巳に霜と見え候由、早起の者共咄候稻のカラレ(刈)方はかとり不申る由農人共の咄に候。石巻白米一升三百二十文玄米一石四兩一朱と申候。二郷は四兩六百メケ(以上の意)也。石巻の釣合にては高し。二日曇る、三日晴天、四日晴天、五日同夏物にて居候。六日晴天、七日曇る七ツ時より雨夜に入り大雨、三番とりより晴るる、八日晴天西風有り、九日晴天、十日晴天、十一日晴天、十二日晴天、十三日晴天。
今年思の外見詰(見込)より米不出、春より總て諸物不熟候候とて同様心を用可申もの也、第一蠶次に苗木の葉は殊に後れ候、畑のものは不作の年葉を用るもの宜し、實を用(ふる)品は不立、大根、からどりは相應なり。

十四日天氣逐々曇り八ツ時後夜に入雨、十五日天氣風、十六日晴天、十七日天氣半曇、十八日同、米は日に増し引上げ三十二貫文去年米也新米二十六メ何れにも不足もの也。だれに聞き候ても天保巳ノ年より宜しと云も然し米今十八日玄米三百二十新は二百六十古四百文。石巻四百八十是古白也然し米拂底也。

十九日晴天、二十日曇る時雨あり、二十一日に天氣也、二十二日晴天、二十三日同、二十四日曇る、米又上げ古玄米石にて三十三メより四メ迄大豆百六十文、二十五日晴天、二十六日天氣晚より雨、二十七日天氣風となり。此節二郷にて米三百五十文にて拂底なり。石巻より米買に參る白米五百文の由、二郷は玄白共に更に米の賣買無之候事、二十八日朝曇四ツ時雨となる後晴天二十九日晴天。

十月一日(十一月七日)晴天風、此頃になり稻逐々悪く成り候由、西根の方は極不作の唱に候、御手前様(涌谷藩)御分より米六石出るよし五十二三文の處也。二日天氣、三日同、四日雨、五日天氣、六日同、七日同、八日同、九日同、十日天氣、十一日(十一月十七日)同夕方地震あり、十二日晴天、米又上り石六兩也一升三百八十四文古は七兩、十三日天氣、十四日時雨、十五日同、十六日天氣、十七日同、米少々石巻下け氣味の由、酒は濁酒手作迄も禁せられ候趣申來る、十八日天氣、米大に下り石巻にて一石に付金五切下る由二郷にても三十メ文になる、十九日天氣、

地震

十一月二十六日初雪

二十日曇晚より夜に入雪雨共朝迄降る初雪なり高サ三寸位、二十一日もてり居候へ共雪少々降る也、二十二日天氣、二十三日天氣、二十四日天氣、二十五日天氣米大に引下げ、涌谷金一分に六升也二郷は石二十九メより上米にも候へば三十二メ位となる、二十六日天氣、二十七日同斷、二十八日同、二十九日天氣、三十日天氣。

油價昂る

十一月一日(十二月七日)天氣、二日同風、三日雪少々降る、四日天氣、五日雨、六日天氣、七日同、八日同、九日雪、十日風、十一日同、十二日天氣、十三日天氣夜雨、十四日天氣、十五日少雪、十六七八日天氣、十九日二十日天氣、二十一日同、二十二日同暖氣也、此頃に成り米石にて二十八メ文也、吟味米は三十メ位迄も有之候由唱候、油は引上二百八十文となる如何となれば不作に付畑へ麥斗時き茶種は至つて不足と相成、尤も魚油も相出不申、依ては明年四月迄にも上り可申哉に相見え申候也。二十三日天氣、二十四日五日同、二十六日同、二十七日雪風、二十八日寒天、二十九日同、三十日天氣。

十二月一日(一月六日)天氣也今曉八ツ時四分寒入る也米は逐々引下り當時賣買二十七メ四五百にて引不申方也大豆上り二百文一升にて。
八月七日(九月十五日)より雨、夜に入り雨、曉より雨少降大雨時化となる、是にて稻大に痛む世上半作心元なしと云。
(以上高橋氏記録)

慶應三卯年(紀元二千五百二十七年)

豊作
月蝕
月紅色を呈す
風霜?
嚴寒
乏雨

一月朔日(二月五日)極上天氣五日迄上天氣、九日雪風十日□風。
二月初日(三月六日)上天氣、三日雨、四日雪降、十五日月蝕。
四月十五日(五月十八日)曉殘月紅キ事朱の如し。四月中地桑一升代二百五十文。
五月二十三日(六月二十五日)地震半時斗。
(以上荒氏記録)
慶應三卯正月元三四日迄至極の春光也、五日より風雪甚惡路也、殘寒最も甚しき事近年無之事。正月十七日(二月二十一日)雪、其後二月十二日(三月十七日)迄雪雨更に無し風のみなり、依て春色日に増し。然に十二日晝後より黒

八一

大雷雨

寒 春寒

雲天に流れ雷聲甚し、雨を注ぐなり。二月の大雷雨に覺不申也。過六日鹽釜町大半焼る人四十人以上焼死と云、逐々承るに穴藏に入り蒸し死の事聞ゆ、馬三焼失と云。去冬十二月下旬米一升二百八十五文二月十日に成り三百五十二文となる米夫れにて不調也。同日少く雪降る。十一二十三天氣。十四同、十五日(三月二十日)夜雪少々降る、十六日天氣、十七日天氣、十八日曇る。古より茄子不作大根の宜しき年に米の宜しき事なし心得肝要なり。十九日天氣、二十日同、二十一日天氣、二十二日(三月二十七日)雲甚寒し。二十三日天氣曇寒し。二十四日晴天、二十五日同、二十六日朝少々雨氣後天氣、二十七日曇、中(旬)頃米大に引つる一石金五兩三分より六兩迄の取引なり、右は去年米なり、玄去年米は六兩二分位迄も賣買候者相聞ゆ、二十八日曇、二十九日雨、三十日雨。

四月八日春寒降雪
南冷風

雷雨

猛信風

三月一日(四月五日)小雨、二日雨、三日も雨。孟宗竹去る二十一日(三月二十六日)櫻井床工門より貰ひ植候處大風雪に痛み候に付又々貰ひ植候、終夜小雨、翌四日明方より雪寒し、終日雪、五日晴る寒し、六日同寒し南甚冷風。七日朝霜甚し天氣、八日天氣、九日天氣晝後暖なり然に大雷となる夜半迄雨あり、翌十日天氣大西風となる、十一日曇夜雨あり、十二日曇寒し、十三日天氣、十四日同、夜に入り大雨、十五日五ツ時頃迄雨、飯後晴大西風となる、米少々下け氣味也、夜に入り益々大風、當年の大西風、十六日朝晴矢張風暮方より休む、十七日晴天。種物は十五日十六日と伏せる、十八日朝小雨遂々強し夜に入り降る、十九日朝霧る風になる、二十日天氣風あり、二十一日天氣、二十二日晴天、二十三日同、二十四日同、二十五日晴天、此頃は日々の風なり、二十六日晴天、二十七日同、二十八日同、二十九日同。

五月十七日水霜、
時鳥初て啼く

四月一日(五月四日)曇る冷る也晝後小雨あり、二日晴天、三日同、四日同、五日曇る、六日同晝後少々雨あり、七日天氣曇る、八日雨降り照り續きの後にて甚しく諸人悦ぶなり、此頃は石巻も米大に引き下り候由、九日晝八ツ時迄雨八ツ時後霽る、十日晴天風あり、十一日天氣朝飯後より曇はく也、十一日密雨(細雨?)晝後はる夜に入り雷聲あり、十三日明時より大風小時雨あり、大西風跡蠶種此日はく也朝飯後、十四日(五月十七日)天氣朝は水霜也冷る時鳥初て聞く、十五日晴天米引下ると云、濁酒は當分一杯は百六十文清酒一杯三百文なりと云、十六日好晴温暖已に薄暑と申程也、十七日天氣風あり、十八日天氣風米は五兩也と云先達中より一兩下る尤も米出氣味也、十九日天氣風、

地震

二十日曇風、二十一日天氣風、二十二日曇辰巳風雨氣催候へ共日々風のみ也晝より雨夜に入雨甚し好(き)雨也、二十三日はる、二十四日朝霧雨四ツ時後はれ曇る、二十五日天氣曇、二十六日天氣風、二十七日晴天風米大に下る十九切にて溢る程也、二十八日晴天、二十九日晴、三十日晴天。
五月一日(六月三日)晴天夜四ツ時過より雨、翌二日雨也出風甚好雨晝頃より霽る、三日晴天、四日天氣、五日同夜に入り雨あり、六日天氣、七日は暑氣と申程なり然し風あり、七日田植也、八日天氣暑也、九日同、十日天氣曇夜に入り雨あり、十一日天氣曇、十二日天氣、十三日同夕方小雨有、十四日天氣、十五日天氣曇、十六日上天氣、十七日同田植仕候也、十八日(六月二十日)晴天朝より俗(給?)衣ものにて終日過す、十九日天氣風あり、二十日天氣、二十一日天氣、二十二日同、二十三日(六月二十五日)天氣八ツ時半頃に地震あり、二十四日天氣夜半より雨甚好雨、二十五日雨霽れ大西風と成る、二十六日天氣風あり、二十七日同、二十八日天氣日々の風也米又々下り十六切の由、二十九日天氣風。

大雷雨

雷雨
日々高温

六月一日(七月二日)天氣此日より蠶上り初む、二日同、三日同、四日晴天暑氣、五日天氣暑氣也、六日南風曇る夕方より夜に入小雨あり、七日天氣、八日晴天暑氣也、九日同、十日雨、十一日曇、十二日曇霧大雷雨八ツ時半頃より霽る時々夜雨、十三日曇雨、十四日朝曇晝後晴暑氣夜に入りても暑也、十五日晴天暑也夜迄蒸す也、十六日曇暑氣也、十七日曇時々雨あり晝後本降りとなる、十八日暑雨少々、十九日天氣暑也晝雷大雨直く晴、二十日大暑八ツ時半時雷雨夕方霽る、二十一日曇暑、二十二日天氣大暑夜雨有、二十三日時々雨あり風となる、二十四日大暑、二十五日同、二十六日雨、二十七日天氣、二十八日雨天昨日夏蠶をハキ候事、二十九日晴天米大に引き下る、春中上米一石金二十五切迄上せ候に此節上米十三切五分より十四切位の由。

地震
地震

七月一日(七月三十一日)晴天、二日天氣、三日天氣暑、四日同、五日曇蒸四ツ時半頃地震あり七ツ時頃小雨直く霽る、六日曇小雨七ツ時頃有、七日曇夜九ツ時頃地震あり、八日曇朝飯後雷雨夕方晴夜雨あり、九日晴夕方時雨夜に入り雨、十日曇蒸す也、十一日雨天、十二日天氣、十三日大暑也、夕方雷雨有、十四日大暑黄昏雷雨、十五日大暑、十六日大暑、十七日同、十八日朝夕涼し日中暑也、十九日同、二十日甚暑、二十一日同、二十二日同、二十三日同、

二十四日殘暑甚し、二十五日殘暑極めて甚だし、二十六日曇る、二十七日甚暑、二十八日同此夜時雨有、二十九日天氣暑朝は涼し。

八月朔日(八月二十九日)曇雨氣専らに候へ共不降蒸す也、二日曇也、三日同夜雨有大雨なれ共一刻斗也甚好雨也、四日暑氣南風也、此日二十十日也、五日甚暑稻穂極り也、六日暑、七日同晝後小雨、八日暑夕方小雨夜大雨、九日時々雨あり暑也逐々天氣、十日暑き天氣也、十一日同、十二日同、十三日同夜に雨終夜降る、十四日朝より終日夜に入り降る、十五日曇る無月なり、十六日曇る夜に雨、十七日曇、十八日同、十九日同、二十日同、二十一日天氣此頃より冷氣を催す也。稻作は勿論諸作近年の上々作也。夕方時雨あり、二十三日天氣、二十四日同、二十五日は小雨有、二十六日雨天、二十七日同、二十八日五ツ時前小雨四ツ時より晴天、二十九日雨天、三十日同。

九月一日(九月二十八日)雨、二日天氣西風、三日同、四日天氣、五日同、六日同、七日朝より雨、八日天氣、九日同、十日同、十一日十二日十三日同(以後病人の爲め記事中絶し冬至入りより記し始む)。

暖冬、冬至に蛙啼く

此年十一月二十七日(十二月二十一日)冬至也、冬至前は申迄に及ばず冬至後(も)暖氣甚敷蛙啼也、二十八日曇、二十九日同、三十日同。

極月一日(十二月二十六日)曇る、二日天氣、三日蛙啼也三月下旬の如し、四日同、五日同、六日同、七日朝より雪降る、八日小雪、九日天氣暖也、十日朝より雪終日六七寸也夜に雨、十一日小雨、十二日同、十三日雨、十四日同夜に入大雨降り續く也、十五日夜同斷也依て雪解盡る大惡路也、十五日夜に雨、米は十一月中金十五切の處逐々：以下缺。

(以上高橋氏記録)

大不作

慶應四年(紀元二千五百二十八年) 明治元年

荒氏曆本には氣象に関する記事なし。

三月二十六七日(四月十九日二十日)頃米一石二兩位也、金一分に錢二ノ五百位也、定は一ノ八百文。四月になり六切位なり一石にて。

夏季落霖 暖冬

五月一石十八メ位。

五六七八月の間雨也晴天は更に無し九月に成雨止。

八月一石にて十八メより二十メ位。九月石十八メ文。十月石二十メ文。十一月石にて二十二メ文。冬に成甚暖也、水物不出程也雪は尤(勿論の意)無し、十二月石二十四メ五メ。(以上高橋氏記録)

明治二年(紀元二千五百二十九年)

荒氏曆本には氣象に関する記事なく。高橋氏分は缺本。

明治三年(紀元二千五百三十年)

荒、高橋兩氏の曆本共氣象に関する記事なし。

明治四年(紀元二千五百三十一年)

三月十六日(五月五日)當屋敷境にて白鶴を見る。

白鶴來る 始めて寒暖計にて氣温を測る

(以上荒氏記録)

六月十二日(七月二十九日)中九十五度。一月元日(二月十九日)四ツ時頃より九ツ時分まで雪降り次に毎日ちらり／＼と雪降り、九日晚より十日五ツ時頃迄雪一尺五六寸降り。

四月十三日(五月三十一日)田植。

五月十三日(六月三十日)田植。

八月十五日(九月二十九日)月おぼる也。

九月九日(十月二十二日)雨朝斗、此節四五十より五百迄賣買。

(以上高橋氏記録)

明治五 申壬 年 (紀元二千五百三十二年)
九月八日 (十月十日) 雨。

(以上荒氏記録)

明治六 酉癸 年 (紀元二千五百三十三年)

七月二日 (八月二十四日) 向藏田初田植、三日植仕候也。(?)
十一月二十二日 (一月十日) 初雪降り。

(以上荒氏記録)

明治七 戌甲 年 (紀元二千五百三十四年)

荒氏曆本に氣象に關する記事なし。(以下荒氏記録のみなり)

明治八 亥乙 年 (紀元二千五百三十五年) (以下太陽曆)

暴風雨

八月十一日大嵐。

明治九 子丙 年 (紀元二千五百三十六年)

氣温

七月十一日八十九度。

明治十 丑丁 年 (紀元二千五百三十七年)

大暴風

三月一日往來止の大嵐。三十一日近年無之大雪盈尺。

明治十一 寅戊 年 (紀元二千五百三十八年)

五月十二日雨。九月十日半晴。

明治十二年、同十三年記録ナシ。

明治十四 巳辛 年 (紀元二千五百四十一年)

洪水

七月六日洪水。

明治十五年欠本。十六年記録ナシ。

明治十七 申甲 年 (紀元二千五百四十四年)

晚雪

四月一日雪。七月二日木瓜(胡瓜)初食。

明治十八 酉乙 年 (紀元二千五百四十五年)

十月二十四日雨。

(完)

14.6=
333

昭和十八年二月二十五日印刷
昭和十八年二月二十八日發行 (非賣品)

編輯兼
發行者 中央氣象臺

印刷者 東京市神田區美土代町十六番地
(東東三五) 高木外史
東京市神田區美土代町十六番地

印刷所 株式會社 三秀舍

14.6-

338

製	本	控	同	第	號
14.6	面	338	年	月	日
書名	中央氣象台彙報	(220	220)
著者	同所編				
著者	同人				
受備	年	月	日		
					冊

146
338

終